
流星のロックマン 《次元を超えた出逢い》

ZX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン《次元を超えた出逢い》

【Nコード】

N1121Q

【作者名】

ZX

【あらすじ】

ある日突然流星のロックマンの世界に飛ばされた少年綿澄賢哉が星河スバルとともにFM星をも巻き込む新たな危機に立ち向かう。

ブログ 異世界へ（前書き）

これは初めての小説です。このストーリーは前から温めていたものでこの場に出せて嬉しく思います。誤字脱字などが見つかったら知らせてください。ご意見やご要望なども受け付けます。これからよろしくお願いします

ブローグ 異世界へ

ここは一面真っ白な世界。そう俺の意識の中だ

誰かが意識の中に語りかけてくる。そいつは何か知っていて俺だけに伝えたいような口調で俺の意識の中で語りかけてくる。

「貴方は選ばれた人間です。今から貴方が行く世界、その世界の危機に立ち向かえる人間の一人が貴方です。だからこの危機に打ち勝ってください」

心当たりの無い言葉に俺は驚いた。何故俺みたいなネットとかゲームで遊んでる普通の人を選ばれるのだろうか。俺は真っ先にこう言った

「唐突に言われても何がなんだか分かりませんよ！何故俺なんかが選ばれるんですか！？俺なんかより優秀な人は沢山いますよ？」

「貴方が行く世界にはあの電波体と完全にシンクロ出来る存在がいません。なので、ほかの世界を探してみたところ、貴方を見つけました。今行く世界には、ある危機が迫ってます。この危機から逃れるには貴方の力が必要なのです。健闘を祈ってます。さようなら。」

俺は「電波体」と言う言葉にはっとした。その瞬間、今から行く世界が大体どこか分かった

そして、次第に意識が薄れていった…

目を覚ましたらそこには星空が広がっていた。体を起こして辺りを見回してみると、右隣に青い屋根、そしてその上に「BIG WA VE」と書かれた看板、

左前を見るとまた青い屋根の家。少し前へ歩いて右を見てみると、高級そうなマンション。もう少し奥に学校。

何より自分の見た目が変わっていた。アニメみたいに。

全てが確信に変わった。この世界は…

流星のロックマンの世界だ。

ブログ 異世界へ（後書き）

初めてですが、自分ではうまく書けたなあと、思ってます。
アドバイスでもどんなものでもいいですから感想を、ください。待
ってます

星河家へ（前書き）

結構長くしてみました。

星河家へ

やっぱり予想は当たっていた。でも何故この世界に来てしまったのか。そこで記憶をたどってみた。

「確か、夢の中で誰かが語りかけてきて、『貴方は選ばれた人間です。』とか『貴方はあの電波体と完全にシンクロ出来る存在』とか言っていたな…。そして目が覚めたら、BIG WAVEの前。

『あの電波体』というのは何なのだろうか？全く、いきなり過ぎるぞ。急にこんなところ連れてかれたって住む所何もないぞ！？ん、待てよ！そうだ！少し図々しいかも知れないけど…」

俺は、あの青い屋根の家に向かった。そのときだった。誰かがこっちに向かってきた。見かけは30代後半くらいの男の人だ。誰かに似てる。

そして男の人は俺に話しかけてきた。

「君は誰だい？こんな夜遅くに。早く帰ったほうがいいぞ？」

俺はなんて言っているのか分からなくなった。なので俺の予想が当たってるか確かめるために、こういつてみた。

「あの、星河大吾さんは貴方ですね？」

「ああ、そうだが何故俺の名前知ってるんだ？そして君はいったい誰なんだ？」

やはりそうだった。「ゲームで知った。」なんて言えないから理由は伏せておいて、名前だけ教えた

「いや、それは、ちょっと教えにくいですね…俺の名前は『綿澄賢哉』といいます。目を覚ましたらここに居たんです」

せつかく大吾に会えたので、さつき思いついたことを試してみた。

「いきなりここに來たわけだから住む所何もありません。貴方の家に住まわしてくれたら詳しいことを教えます。」

果たしてそう上手くいくだろうか…だがあっさり上手くいった。

「別にいいけど。家は3人しか居ないからましては大歓迎だ。さ、中に入って。」

「有り難うございます、大吾さん！恩にきります！」

これで交渉成立。住む所は確保した。次はこれからどうすれば良いか考えないと。まあとりあえず、何か食べさせてもらって寝ないと。

「とりあえず何か食べさせてください。腹が減ってるので。」

「分かった。多分あかねはまだ起きてるだろうから作らせておくよ」

俺は家の中に入った。入っただけに青いじゅうたんが敷いてあるリビングと薄くて少し大きめのテレビがあった。そして奥には綺麗に掃除されているダイニングとキッチンがあった。まったくゲームで見たものと同じだ。

リビングに誰か居る結構若くて美人の人だ。間違いなく「星河あ

かね」だ。

「大吾さん、お帰り。あらこの子は誰なの？」

「ああ、この子は綿澄賢哉という人だ。なぜか俺のことを知ってるんだ。とりあえずこいつの分も飯作ってやってくれ。」

「分かったわ。夕飯の残りを出すわね。」

そういつて茜は冷蔵庫から何か取り出し電子レンジで温めてからテーブルに置いた。出されたものは、アジの開きと、豆腐とわかめの味噌汁、それとふつくら熱々白ご飯。盛り付け方もプロ並みで、美味しそうな雰囲気醸し出している。俺は待つてましたとばかりに前から食べたかった茜の料理を食べた。

「お、美味しい！茜さん貴女プロですか？ああ、幸せ…俺も貴女みたいな人を嫁さんにしたいですね。」

俺は今言えるほめ言葉を全部吐き出した。それ位美味しかったんだ。人生初めての美味しさ。絶品！まだ言いたいことがいっぱい。幸せに浸っているときに空気を壊すように大吾が口を開いた。

「とりあえず何故此処に来たのか話してもらいたいんだ。」

「（あーあ、話してるうちにご飯冷めちゃう。まあいいや、話さないと大吾の気が変わっちゃうかもしれないからな。）」

そして俺は此処に来たいきさつを話した。

「簡単に言うと、俺は…異世界の住人だ。」

やっぱり大吾は驚いたような表情をした。茜は不思議に思ってるような顔をしてる。

「異世界か？それでどうやって此処に来たんだ？」

最初に口を開いたのは大吾だった。そして俺は説明を続けた。

「此処に来る前、夢の中で誰かが語りかけてきたんです。そして『貴方は、選ばれた人間です』って言われたんです。訳を聞くとどうやら俺はある電波体と完全にシンクロ出来るただ1つの存在らしいんです。」

そしてそのまま意識が薄れて気がついたらBIGWAVEの前に倒れていた。というわけです。そして、俺は、大吾さんや茜さんそして星河スバル君とウォーロックのことも、そして、

シューティングスターロックマンの正体がスバル君だということも知ってます。」

出来るだけ分かるように説明した。そして大吾が口を開いた。

「何故君は俺達の事を知ってるんだ？」

どうやって説明したら良いのか、少し考え込んだ後、重い口を開いた。

「実は、俺が住んでいた世界の電子ゲームに星河スバルがロックマンになって敵を倒し世界を救う、「流星のロックマン」というゲームがあっただんです。」

それでそのゲームにでてくる人物とかが大体分かるんです。」

これで知ってることはすべて話した。後は大吾と茜が信用してくれるかどうかだ。

「大体事情は分かった。明日、ハンターV G 渡すから今日はもう寝なさい」

俺は知っている。ハンターV G とはこの世界の携帯端末機で非常に便利でカメラまで付いている。（小説の設定上こうしないと面白い展開が作れないから）

どうやら茜と大吾は快く信じてくれたようだ。そして俺は黙々と冷めたご飯を食べ始めた。

「不思議ねえ、大吾さん。」

「ああ、だがこいつは何時か大きな存在になるかもな…スバルと同じ位に…」

俺は大吾の言葉を嬉しく思いながら食べている。

10分後…

「ふう、腹いっぱい。茜さん有り難うございました。俺はもう遅いので寝ます。」

満腹になって眠くなったのか、茜にそう言った。

「じゃあ、布団をスバルの部屋に用意するわね。」

「はい、分かりました。おやすみなさい大吾さん」

「ああ、お休み」

そして俺は布団を持つてる茜とスバルの部屋に向かった。

スバルの部屋に入ってみるとやはりゲームで見たとおり宇宙の本が
いっぱいだった。テレビ台の上にはハンターがある。ウォーロック
が居るのだろう。

俺は階段を上ってスバルのベッドの隣まで来て茜に渡された布団を
敷いた。ベッドを見てみるとスバルがスヤスヤ寝息を立てて寝てい
た。

「さあ寝るかな」

そう言っただけ俺は布団の中に入って、深い眠りについた。

これから起こる出来事は何かと不安と楽しみを抱いて…

星河家へ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
感想、待ってます。

驚きの朝（前書き）

結構時間かかってしまいすみません m (|) m
では、読んでください

驚きの朝

朝、窓の外で小鳥が鳴いている。雲はなくて朝のまぶしい太陽の光がこの部屋にカーテンのように入っていく。賢哉は布団の中で目を覚ましていた。

だが、春になっても寒いのだろうか中々起きられずにいた。そろそろ起きようかなあと思った瞬間……

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

ハンターの目覚ましが鳴った。そして賢哉は声をあげて起きた。

「うるせーっ!!」

「ん、ん、何が起きたんだ？」

その声が響いたのか今度はベッドからモゾモゾと眠たそうに誰かが起きた。見た目はやはりパジャマ姿、髪型は尖がつてつんつんしている……筈だが寝癖のせいで額方角から1番目の尖がりは

賢哉から見て左に折れ曲がつており2番目の尖がりには右に折れ曲がつており、最後の尖がりには左に折れ曲がつている。そう、この一見普通（髪型以外）に見えるこの少年、

実はかつてこの世界の危機を3度も救ったシューティングスターロツクマンこと星河スバルだということは賢哉もよく知っている。

「ロツク、こんなに声出して五月蠅いよ。」

「俺は何もしゃべってないぞ？それよりもベッドの隣に誰か居る

ぞ。そいつが喋ったんじゃないか？』

スバルがロックと呼ばれる何かに言ったらハンターの中から、いきなり青を基調としたボディに胸と頭にアーマーを付けているいかにも獣みたいな感じのものが出てきた。

これがウィザードと呼ばれるのは賢哉もちゃんと知っている。そして、少年はロックと呼ばれるウィザードに言われてベッドの隣を見てみた。するとそこには……

上体を起こしている賢哉の姿があった。スバルは不思議そうに賢哉を見る。

「あの……君は誰なの？」

スバルは、お決まりの質問した。賢哉もこの質問が来ることは大体予想できた。とりあえずちゃんとした答えを出そうと頭の中で考える。答えを決めるのにかかった時間僅か2秒。

「まずは大声出してすまなかった。スバル」

「いいけど……って何で僕のことを知ってるの？」

「それはな………」

賢哉は自分が此処に来た経緯、何故スバル達のことを知っているのか話した。話した後最初に口を開いたのはウォーロックだった。

『俺達の活躍が異世界ではゲームになるなんて、すげえな……』

ウォーロックは驚いたような表情をしている。次に口を開いたのはスバルだった。

「『あの電波体』っていうのは何なのだろう……」

「まあ、これからここに住むのでよろしくな！スバル！」

「うん、よろしく、賢哉君」

二人はその後スバルだけ着替えて1階に向かった。1階には茜が料理を並べていた。皿の数は8つで茶碗の数も8つ。並べられた料理には人参のグラタンがあった。今、リビングのソファで座って、新聞を読んでいる大吾の好きな食べ物であってスバルの嫌いな食べ物だった。

この事は賢哉も知っている。ゲームを完全にコンプリートしたからだ。これを見たスバルは当然のように嫌そうな顔した。というより目から光が失いかけており生気が抜けたような顔をしていた。賢哉はただニヤニヤして見てるだけ。とりあえず挨拶。

「お早う、茜さん。今日も美味しそうなご飯だね」

「おはよう、かあさん……朝からこれはキツイよ。これ、いじめ？僕は早く学校行きたいのに……」

「有り難うねえ、賢哉。それに比べたらスバル、もう克服しなさいよ。人参くらいで文句言っくんじゃありません」

賢哉はこの家にもう馴染んだのか敬語を使わなくなった。スバルは茜に皮肉を言っている。茜は賢哉に感謝の言葉を述べてからスバルに「まったくもう」といった感じで皮肉を返した

「まあまあ、茜さん、誰にでも苦手なものはあるからさ、俺もあ

るよ、嫌いなもの。おい、スバル、あまり茜さんを困らすなよ。出されたものはちゃんと食べる。常識だぞ。さ、食べるぞ。」

「はいはい、食べるよ。」

「俺も食べるか。美味しそうだなあ。」

「食べないと家事出来ないから私も」

「……いただきます」「」「」

4人そろって食べ始めた。スバルは当然の如く先に嫌いなものを食べる方針で人参グラタンを鼻を摘みながらいやいや食い始めた。スビードはきわめて遅く、時々「おえっ」等と気持ち悪い声を出しながら

食べている。それを普通に食べている人たち3人は呆れ顔をしながらしながら見ている。食べてる途中にスバルが口を開いた。

「うえっ！あ、賢哉君、WAXAに行ってみれば？君は知ってると思うけど曉さんって人に聞いてみれば『あの電波体』のことについて何か知ってるかもしれないよ。」

「それはいい考えだ。行く途中でハンターを買ってやる。WAXAに着いたら曉に聞いてみるといい。何か知ってるはずだ。だから、後で俺について来い。」

大吾の話によると曉はディーラーのアジトでの1件で死んだかと思われたがブラザーが切れてないという理由で調査してみるとノイズウェーブで散り散りの状態の欠片の1つの姿で発見されたらしい。本人に聞いてみると、爆発の直前曉が少しでも爆発の威力を弱めよ

うと爆発の直前に近くのノイズウェーブに入ってそこでジョーカーから吸い取ったエネルギーを爆発させたと言ってたらしい。現場ではエネルギーを半分ほど吸い取られた状態のジョーカーだけが爆発したからスバルたちは何とか生きてられたということになる。それで、暁も爆発のエネルギーが弱かったのか、チリヂリの状態で済んだ。それをサテラポリスとWAXAが探して再構築し、今に至ると言うわけだ。賢哉は納得したのか、

「よっしゃ！暁生きてたのか、凄く嬉しいぜ！何てったって俺、暁のファンだからな！大吾さん、そろそろ行こうぜ。」

「はは、暁のファンだったのか。暁、それ聞いたら喜ぶだろうな。じゃ、行こう。付いて来い！後スバル、早く学校行けよ。」

というような会話を交わしてるうちに全員食べ終わっていたらしく、スバルは、2階で準備していた。しばらくするとスバルが準備を終え戻ってきた。その瞬間呼び鈴が鳴った。賢哉も知ってるであろう、委員長達3人組だ。賢哉は大吾と先に行ってしまった。そして、スバルは委員長達に應對する。

「おはよう！皆！」

「お早う、スバル君」

「よう、スバル」

「お早うございます、スバル君」

上からスバル、ドリル頭が特徴の白金ルナ、小学生とは思えないほど太っていて頭にヘッドギアをつけた牛島ゴン太、背が小さくて眼

鏡かけているキザマロである。皆と挨拶を交わしスバルは「行つて来ます」と言つて家を出て行き、委員長達と通学した。通学中、最初に口を開いたのはルナだった。

「さつき、すれ違つた貴方のお父様と一緒にいた男の子は、誰なの？スバル君？」

やはり当然の質問。スバルは、答えた。

「彼は綿澄賢哉。異世界からきたらしいんだ。彼は僕たちのことを完全に知っているらしい。何故なら彼の世界では僕の活躍を描いた電子ゲーム、「流星のロックマン」というのがあるらしいんからなんだ。」

「嘘お！？ほんとなの？この学校に転校して来るのはいつ？」

委員長は興味がわいたのか、テンション高めでスバルに聞いてきた。ゴン太、キザマロの2人は驚いたような顔をしていた。今のルナの目は輝いていて、好奇心に満ちていた。そんな一面はあまり見たことがない。

「あの……委員長、僕も分からないんだ。けどその内きつと来ると思うよ。」

そして、委員長達一行は学校に向かって歩き出した。

驚きの朝（後書き）

暁のことで何か矛盾点があったら改稿します。
感想待ってます

封印されていた電波体

スバルが学校に行った頃、賢哉と大吾はWAXAに行く途中のスピカモールにハンターV.Gを買ったために来ていた。

「どの色にしようかな？青とか緑は俺の柄に合わないし、かといってピンクは女性用だから。迷うな。」

賢哉はどの色にしようか迷っていた。大吾は呆れた顔をして急かした。

「早くしてくれよ。WAXAに遅れてしまう。今日は大事なミーティングがあるんだ。」

「お？1つだけ、赤いやつ見つけた。これにしよう」と

大吾たちは早めに支払いを済ませWAXA行きのウェーブライナーにのった。ウェーブライナーの中では賢哉はハンターをいじっていた。

数十分後……

「さあ、着いたぞ。ウェーブライナーを降りろ。足元に気をつけるんだぞ？」

「分かってるよ。よいしょっと。薄暗い駅だなあ」

二人は薄暗い駅を歩き、センスのよさそうな扉を開けると。そこには灰色で凄く大きい機械的な建物が見えた。

「ここがWAXAか。ゲームで見たものよりも迫力あるな」

「とりあえず、お前は今は中に入れない。俺が先に入って手続きをとってくる。お前はここで待ってる」

「分かった。なるべく早くね」

大吾は、そう言って、WAXAの中に入っていった。10分後……

「手続きが取れたぞ」。指紋登録しろ」。

「分かった。此处に親指あてりやあいいのか。」

「ピー、ピピピ、シモントウロクシマシタ。」

指紋登録を終えると、大吾たちは中に入っていった。中では青い髪の毛を首筋まで伸ばして、どこかで見たことがある棒状のお菓子をサクサクサクと五月蠅く食べていた。

「お前が暁か……」

賢哉は初対面にもかかわらずタメ語で話した。なんとという礼儀知らず。だが暁は気にせずに話した。

「ああ、俺が暁だ。お前の口で此处に来てしまった経緯を話してみろ。」

「分かった」

賢哉は今までであったこと、どうして此处にきたのか、そして何故この世界のことを知っているのか話した。話を聞いた暁は、『あの電波体』という言葉にピンときた。

「賢哉、お前の波長を調べさせてくれ。」

「え？何か分かったのか？」

賢哉はいったい何が何だか分からずに暁に連れてかれた。そして大吾もそれについていくかのように仕事場に向かっていった。

WAXAメインコンピュータールーム。賢哉は意味が分からない機械に入れられていた。

コンピューターを操作しているのは変な髪形をしているお婆さん、ヨイリー博士だった。

「賢哉ちゃん、もうちょっと待っていてね」

「ちゃん付けて……」

数分の後、ヨイリー博士は波長を調べ終わり、賢哉が機械から出てきた。途端にヨイリー博士は涙を流した。

「波長があの子と完全に一致しているわ……よかった……あの子に友達が見つかって……グス……賢哉ちゃん、『あの電波体』っていうのが分かったの。名前は

「サザンクロス」。あの子は小さい頃からFM星ではその力で化

け物扱いされて孤独な毎日を送っていたの。ある日我慢できずにF
M星で暴れてしまつて。FM王に捕らえられたの。

でも数日で牢屋を抜け出されたの。だからまた捕らえて、今度は
地球に送られたの。そして、WAXAの地下に完全に封印されたの
……理由は、FM王がこう話してたわ。

『よは、こんなことをして本当に申し訳ないと思つてゐる。もし
サザンクロスと友達になれるものが居たら、すぐに解き放てるよう
にするために地球に送つたのだ。』

どうかサザンクロスを頼む。』ってね。賢哉ちゃん、私につい
て来て。』

「俺ももらい泣き、グス……やつと見つかったのか……今まで孤独に
生きてきて本当に辛かつたんだろぅなあ。よーし！俺が友達になつ
てやる！ヨイリー博士、行くよ！」

ヨイリー、暁、賢哉は、長いエレベーターに乗つて地下の廊下まで
来た。そこは薄暗く、恐らく誰も足を踏み入れてないのだろぅ。埃
やゴミ等が散らかつてゐる。

一同は嫌な雰囲気を出している部屋のドアの前まで来ていた。その
部屋には。特殊なロックがかけていて。電波体でも絶対に出入
れないようになってゐる。ヨイリーは何かの機械をいじつて、
特殊なロックを解いている。そして扉を開けた。するとそこには、
鎖で、手を縛られ、目からも希望を失つてゐる電波体がいた。これ
こそが長い間WAXAに封印されてきた、サザンクロス……

「サザンクロスちゃん、ごめんね……グス……長い間こんなところ
に閉じ込めたりして……でも、もう大丈夫よ……あなたと波長が合う
友達が見つかったの。もうあなたは、孤独な思いをしなくていいの。
今、貴方を縛り付けてゐる鎖を解いてあげる。」

ヨイリーは部屋の隅にあるスイッチを押して、手足を縛つてゐる鎖

を解いた。その瞬間サザンクロスは、動き出し、賢哉に向かって声を出した。

『これが私の……友達……。やっと孤独から開放されたのね……。』

「そうだ。今日から俺、綿澄賢哉が友達だ。これからもずっと一緒にだ。もうお前を一人にはさせない！約束する」

『ありがとう……本当にありがとう……』

こうしてサザンクロスは、賢哉のウィザードになった。もうサザンクロスは暴れることもないだろう。そして暁は賢哉をサテラポリスに呼んで、話をする。

「賢哉、お前はF M星人をウィザードに持ったことで電波変換できるようになった。よってトランスコードXXX、「サザンクロスロツクマン」の称号を与える。

そしてお前にはサテラポリス遊撃隊に入ってもらおう。電波変換できる以上、お前は拒否することが、出来ない！」

「へっ！言われなくなっちゃって喜んで入らせてもらうぜ。それにしても何故トランスコードがXXXなんだ？」

トランスコードXXX、何か怪しいそして暁は驚愕の答えを出した。

「お前のウィザードが暴れまわったとき周りの人は避難したお陰で被害はあまり出なかったが捕まえるのに丸々1ヶ月かかったらしいよ。なんでも捕まえようとする度にボロボロになって帰ってくるからなあ。それ位お前のウィザードは強かったんだ。だからそのトランスコードの読み方は「トリプルエックス」でその強さは未知数と

いう意味でこの称号を与えた。」

「何〜〜？サザンクロス、お前、そんなに強かったのか？」

『あのときのことは我を忘れてたから覚えてないわ。気づいたらここにいたの。』

「おい、賢哉、お前はゲームとか言うやつで鍛えられてるんだろう？帰ったらウィルスバスターングでもして自主トレしてもいいぞ。それと俺とブラザー結べ。」

「分かった」

そして暁と賢哉はブラザーを結んだ。その後WAXAのウェーブライナー許可証をもらい、賢哉だけ帰った。

封印されていた電波体（後書き）

結構長くなりました。矛盾点とかあったら知らせてください。
感想待ってます。

いざ、対決

コダマタウン、賢哉はスバルの家に来ていた。時刻は午後2時。一日のうちに一番暖かい時間帯である。賢哉は暇だったので昼寝することにした。

場所ならスバルのベッドということで決まったが、まだ、問題があった。

『ねえ賢哉、一緒に寝ない？』

そう、サザンクロスが賢哉に甘えていたのである。こう見えても甘えん坊な性格だ。

「だめだめ。お前は女の子だろう？一緒に寝るなんて出来ないよ。ハンターで寝てなさい。」

『女の子でいいじゃん。それとも、私のことが嫌いなのか？』

サザンクロスは酷いことに上目遣いまで使ってきた。賢哉は堪忍したのか

「（そんなに俺のことが好きなのか…）分かったよ。おいで。」

『やった〜！賢哉だーい好き！』

「（本当に好きなみたいだな）じゃ、お休み。って抱きつくな！」

なんとサザンクロスは、賢哉に抱きついていたので。そんなに賢哉のことが好きだったみたいだ。

『いいじゃんいいじゃん。いつもこうしてね。』

「（見掛けに合わず甘えん坊だなあ）……分かったよ。起きたら自主トレだぞ。」

『ハ―イ』

そついい残すと二人は夢の世界へ旅立っていった。

時は過ぎて2時間半後……

スバル達は学校から出て下校中だ。

「にしてもゴン太は相変わらずねえ。居眠りして先生から起こされたら、いきなり「俺の牛丼返せー！」って言うて、」

「皆から笑われましたね。そのお陰で、僕なんてまだ腹が痛くて困ってるんですよ。」

「面目ねえ。」

「まあまあ、委員長、キザマロ、そのお陰でクラスがいい雰囲気になったんだから許してあげてもいいんじゃないの？」

「まあ今日のところは許してあげるけど、ゴン太、2度と私に恥かせないでね。」

というような話をしている。そうこうしてる内に、自分達の帰路に向かっていった

数分したらスバルは、家の前まで着いた。そこでウォーロックが口を開く。

『おいスバル、家の中からすごい気配を感じる。どうする？スバル。』

「とりあえず入ってみよう。」

そしてスバルはドアをあけて「ただいま」というと茜がいた。

「あれ？賢哉君はどこに居るの？」

「賢哉なら新しいウィザードと一緒に寝てるわよ。」

「へえ、そうなんだ（もう見つけたのか）」

『スバルの部屋から気配を感じるぞ。』

「母さん、2階行ってくる。」

そういつてスバルは2階へ上がっていった。2階ではテレビ台の上に赤いハンターがあり、ベッドを見ると誰か寝てる。スバルとウォーロックは恐る恐るベッドの中を覗いてみた。するとそこには……

幸せそうに寝ている賢哉と、サザンクロスがいた。

「これが『あの電波体』かあ」

『スバル、こいつは「サザンクロス」って言ってな、孤独ゆえにF
M星を暴れ回りどこかに封印されたやつなんだ。やっと友達に出会
えたのか。』

俺もこいつのことを化け物扱いしていたことを本当に反省してい
る。』

「ふ〜ん、そんな過去があっただ。本当に辛かったんだろうね。」

という風に話してるうちに賢哉が目を覚まし、小さく欠伸をしながら
体を起こした。

「ふあ〜あ、よく寝た。あ、スバル、帰ってきたのか。」

「まあね。」

『ん、ん、今何時かな？あれ、ウォーロック久し振り。』

『あ、ああ、久し振りだな。サザンクロス。お前を化け物扱いして
本当にすまなかった。許してくれ。』

『いいのいいのよ、気にしてないよ』

その後、サザンクロスは、此処に来た経緯や自己紹介をスバルにし
た。その後賢哉がサザンクロスに自分のことを話した。

「あ、そうだ！スバル、俺のトレーニングに付き合ってくれない？」

「いいけど。こう見えても僕結構強いよ?」

「それがいいんだ。ウィルスじゃつまんねえ。」

スバルが承諾した途端、ウォーロックが警告してきた。

『サザンクロスと戦わないほうがいいぞ? あいつの実力はFM王とも肩を並べるほどだ。』

「そんなに強いのか? でも僕は、賢哉君の実力を確かめたい。僕もいいトレーニングになると思うから。」

『知らんぞ。やられても』

そしてスバルと賢哉は展望台まで来ていた。そこでは今戦いが始まるうとしている。

「まずは俺からだ。トランスコードXXX! サザンクロス・ロックマン!」

「僕も行くよ。トランスコード003! シューティングスターロックマン!」

いざ、対決（後書き）

サザンクロス、結構可愛いですね……
感想待ってます

赤き戦士VS青きヒーロー　そして、敵の襲来

二人はトランスコードを転送して電波変換した。その瞬間賢哉は赤い光に包まれて、赤き戦士サザンクロス・ロックマンに。スバルは青い光に包まれ、青きヒーロー、シューティングスターロックマンになった。

サザンクロス・ロックマン（以下SCロックマン）は赤い体に頭に赤いヘルメット、腕と脚に赤いアーマーが装着されていて、青いバイザーを付けていて、胸にX字の紋章が刻まれている。そして、周囲には

4つのジェネレーターが浮かんでいる。

シューティングスターロックマン（以下SSロックマン）は胴体部分は黒くて手足には青いアーマーが装着されていて、赤いバイザー、腕にはモニター、胸には流星のマークという姿だった。

そしてサザンクロスがウィザードオンにして賢哉の耳元で囁いた。

『私が戦い方教えてあげる。ゴニョゴニョゴニョゴニョ……………』

「OK、それじゃ始めるぞ。」

「うん、受けて立つよ。」

「「ウェーブバトル、ライド・オン!!」」

SCロックマンはサザンクロスから戦い方を教えてもらってから二人は戦いの合図を行った。今、赤き戦士と青きヒーローとの戦いが始まる！

「まずは此方から行かせてもらおうよ。ロックバスター!!」

SCロックマンは手始めにロックバスターを撃った。弾はまっすぐ進んでSCロックマンに直撃するかと思ったその時……

「ジェネレーター起動、ガード！」

SCロックマンは浮かんでいたジェネレーターを前に出して、ロックバスターを防いだ。

「次は此方から行く。レッドレーザー！」

SCロックマンは手の平から紅蓮のレーザーを放出した。だが、Sロックマンは、軽々避けて、

「バトルカード！ワイドソード！」

横長のソードを繰り出した。だがそれ位で焦るSCロックマンではない。

「レッドレーザー出力上昇！逆噴射！」

SCロックマンはレーザーの出力を上昇させ、逆噴射し、後ろに避けた。だがSCロックマンは周波数変換でSCロックマンの後ろを取り追撃を加えた

「甘いよ！バトルカード！ブレイクサーベルX！」

「ぐおっ！！？なかなかやるな。」

SCロックマンはブレイクサーベルを背中に食らった。少しよろつ

いたが、体勢を立て直し、

「そろそろ本気出すか……ジェネレーター起動！包囲しろ！そして、メテオレーザー！」

すると、ジェネレーターがSSロックマンを包囲して、レーザーを放った。これは何も出来ずに食らってしまう。

「ぐあああああつ！！？」

これには膝をついてしまったが直ぐに立ち上がり、体勢を整えた。

「どうやら本気出さないと負けちゃうみたいだね。此方も本気で行かせてもらうよ。バトルカード！シャイニングブレード！」

「新しいバトルカードかよ。計算外だぜ。ならこっちも、ブラッディレッドソード！」

二つの剣が交じり合い、ギギギギと音をたてながらつばぜり合いをしている。

「甘いぞ！レッドレーザー！」

つばぜり合いをしてるときにSCロックマンがSSロックマンの腹に手を当てて0距離でレッドレーザーを放った。SSロックマンは堪らず吹っ飛んでしまう。

「うわあああああああつ！！！！？」

SSロックマンは数メートル離れた地面に倒れた。何とか立ち上が

つたが既に肩で息をしている状態だった。ふと腕のモニターを見ると、「流星サーバー アクセス」と表示されている

「なんでだ？メテオGは消滅したはずじゃ……まあいいか、ファイナライズ！ブラックエース！」

そしてSSロックマンはファイナライズした。赤いノイズに包まれてから、漆黒の体にノイズで構成された翼、右腕にはノイズで出来たソードを装着してる、ブラックエースが出てきた。

「ちっ！ファイナライズされたか、厄介だ……っ！？」

ロックマンは、ファイナライズした瞬間一気にSCロックマンの目の前まで移動して、ソードで切るうとした……その時

PPPPPPPP

二人のハンターからメール受信の音になった。二人は、受信箱を見してみた。

「暁さんからだ。読んでみよう。えーと

『このメールは、遊撃隊全員に送ってある。コダマタウンで大量のウィルスと異常な電波反応を確認した。至急現場に向かってくれ

暁シドウ』

だってさ。勝負はお預けだね。ブラックエース解除。リカバリー

300x3」

「チエツ！もうちょっと楽しめそうだったのになあ。じゃあ行くか。

」

コダマタウンウェーブロードでは200体くらいはいるウィルスがいた。

「うわスゴイ数だな。とりあえず倒すぞ。ジェネレーター起動。とにかくいろんな場所へメテオレーザー！」

「倒すのに時間かかりそうだね。バトルカード！ジャイアントアックス！」

二人は順調にウィルスを倒していた。やっと全て倒し終えた後ウェーブロードの奥から誰かがやってきた。

「もう倒したのか。早いな。」

「「お前（君）は誰だ！？」」

現れたのは、なんと人間だった……が、

『おい、スバル、こいつからは人間の気配なんて感じないぞ。』

「え？嘘？どう見ても人間だけど。」

電波体だった。そして謎の人間型電波体は口を開いた。

『俺はあの方に作られた電波体、インフルーム。あの方の命でお前達を抹殺しに来た。電波……』

電波変換しようとした時二人の後ろから声が聞こえた。

「おいスバル、来てやったぞ」

「スバルくん、来たよ。」

後ろから赤い牛のような姿をした電波人間、オックスファイアとピンクの体にギターを持った電波人間ハーブ・ノートが此方に向かってきた。

「ゴン太、ミソラちゃん！」

「おい、ミソラ、ゴン太、遅すぎるぞ。ウィルスなら全部倒したぞ。」

突然初対面の人から自分の名前を呼ばれ、驚いているとミソラ。

「どうして、私の名前知ってるの？」

「後で話す。敵は待つてくれないみたいだからな。」

「何人が増えたか。厄介だな。電波変換！」

インフルームは、光に包まれ、緑の体にアーマーを全身に纏った姿に変身した。

そして5人は同時に声を張り上げ言った。

『「「「「ウェーブバトル、ライド・オン!!!!!!!!!!」」」」』

こうしてインフルームとの戦いが始まった。

赤き戦士VS青きヒーロー　そして、敵の襲来（後書き）

自分でも書いててうまく書けてるなあと思いました。
皆さんの感想を心よりお待ちしております。

驚愕の来訪者（前書き）

嫌な予感がしますね

驚愕の来訪者

まずは、オックスファイアから攻撃を仕掛けた。

「ブロロロオオオ！アングーパンチ！」

オックスファイアはインフルームに向かってパンチをしようとした。だがインフルームは余裕の表情を浮かべ、その攻撃を軽々避けた。

「すごいパワー馬鹿だな。こんなんじゃ俺を倒せないぜ。インフルームストーム！」

インフルームは緑色の竜巻を放って攻撃した。至近距離だったので簡単にオックスファイアに当たってしまった。

「ぐああああああつ！！？」

オックスファイアは吹っ飛ばされたまらず気絶してしまった。

「弱い弱い。１発かよ。」

そんな風に余裕こいてる内にハープノートが周波数変換でインフルームの後ろにまわり攻撃した。

「調子に乗らないで！ショックノート！」

やはり至近距離だったのでインフルームに直撃した。インフルームは堪らず2、3メートルほど吹っ飛んでしまった。

「卑怯だぞ！不意打ちとは、許せん！ストームキック！」

インフルームは体勢を立て直し脚に竜巻を纏わせ一瞬でハーブノートの目の前まで来てキックを繰り出した。

「キャアアアアアアア！」

ハーブノートの腹にキックが炸裂し、堪らずに吹っ飛ばされ、5、6メートル離れたウェーブロードに叩きつけられ気絶した。

『どいつもこいつも体力なしだな。次は赤いのと組織のブラックリストに載っているシューティングスターロックマンか。まとめてかかって来い。』

インフルームはまだ余裕の表情を浮かべている。その様子にSCロックマンはキレたのか、

「テメエ！調子に乗ってんじゃねえ！スバル、こいつを倒すぞ。どうせ暁は「ヒーローは遅れて現れる」なんて言って遅刻すると思うから先に倒す。ジェネレーター起動、包囲しろ。こいつだけにメテオレーザー！」

「賢哉君、そのセリフまで知ってるの。じゃ、行くよ、バトルカード！インパクトキャノン！」

各自の強技を当てて、インフルームに直撃した。

『ギャアアアアアア！！！』

あたり一面に爆煙が広がった。数秒して爆煙が晴れたら、傷だらけ

のインフルームが肩を抑えながら立っていた。だがこの様子じゃ、戦えそうにない。

『クソ！今日のところは引いてやる。次あつたら覚えとけよ！周波数変……』

インフルームが逃げようとしたその時……

「逃がさんぞ！オメガレーザー！！」

どこからかレーザーが現れ、インフルームに直撃し、インフルームはデリートされてしまった。

「暁さん！」

「ヒーローは遅れて現れるって言うだろ？」

『シドウ、ただ単に遅刻しただけじゃないですか？』

「アシッドの言うとおり、そんなんじゃあヒーロー失格だな」

賢哉は暁に禁句を言ってしまった。

「うつ！！ヒーロー……失格……？グアアアアアアア！！」

暁はグサツと来たのかその場に倒れてしまった。Sロックマンはその様子に腹を押さえて笑っている。Sロックマンはただ苦笑いを浮かべている。二人は電波変換を解いた

『アシッド、こんなやつ世話して大変だな。』

『同情してくれて嬉しいです』

『ゲッ！同情してしまった！』

『本当にバカですね、貴方は』

『やるか teme エー！』

等とウォーロックとアシッドが喧嘩してしまった。本当にいつも通りだ。さすがにスバルも止めるのに飽きたのかウォーロックを勝手にウィザードオフにした。

『おい、スバルまだアイツをぶちのめしてねえ！早く出せ』

「だーめ！まったくウォーロックは…」

『喧嘩っ早いわね』

『うるせえ！サザンクロス！』

『あらやる気かしら？』

『ヒイ！…ごめんなさい！』

どうやらウォーロックはサザンクロスに弱いらしく、すぐさまスバルのハンターに逃げていった。この中でサザンクロスの恐ろしさが分かるのはウォーロックだけだろう。

「何でサザンクロスがそんなに怖いの？」

『言えるかよ！口では言えない！怖すぎる！』

「何五七五みたいに言ってるんだよ。言っとくけど、俺のサザンクロスに何かしたらただじゃおかないぞ」

「こんなことしてるうちにもう7時だ。帰ろうか。」

そして二人は、倒れてる暁を置いていつて家に帰った。多分、暁はアシッドに引きづられてWAXAに帰るのだろう。

星河家では既に大吾が帰ってきていた。茜も料理を作っているところだ。

「賢哉、スバル、ご飯出来るまで2階で待ってて」

「はい」

スバルの部屋に二人は上がっていった。

「おいスバル。」

「何？」

「誰か忘れてきてねえか？二人くらい」

「んーと、誰か忘れてたような。あ、そうだ！ミソラちゃんにゴメン太だ！」

スバルがミソラとゴン太を置いていつてる事に気づいた瞬間呼び鈴がなった。

ピンポン ♪

「誰だろう?」

『ハープの波長感じるぜ』

「まさか!」

二人は面白いようにハモツた。そして二人は一階へ降りていった。1階では誰かがソプラノトーンの聞き覚えのある声で

「お邪魔します」

と言っている。玄関を見ると、二人は確信した。

「ミソラ! (ちゃん!)」

驚愕の来訪者（後書き）

来たアアアア！

ですがこうでもしなきゃ面白い展開が作れないんです。

許してください。

感想待ってます

賢哉の計画

何とミソラがこの家に来ていたのである。スバルと賢哉は驚いた表情をしている。

「何でミソラちゃんが此処に来てるの？」

「そして何しに来た？」

いきなりの質問にミソラ慌てている。そして、ミソラは少し考えてから答えた。

「えーっとね、今、もう遅い時間でしょう？だから此処に来たの。ゴン太君は家に帰ったよ。そして何しに来たかと言うと、スバル君の隣にいる男の子がいったい誰なのか聞くのと、

此処に泊まりにきたの。」

衝撃の一言。スバルと賢哉は口をあんぐりと開けた。そして息を大きく吸いこんで、

「何だと~~~~~~~~!!!!!!?」

それはそれは茜と大吾が耳をふさいだほど大きな声だった。ましてやミソラは鼓膜がちぎれそうな程だった。

「五月蠅すぎるよ、スバル君とその男の子。早く上がらせてよ」

「ごめんね、さあ上がって。」

そしてミソラは、スバルの家が上がっていった。一方賢哉はハンターのカメラを見ながら、何かを企んでいた。

「クッククッククック、ベストショットを暁に見せてやる。」

『まったく賢哉は何考えてるのかしら。』

リビングでは、スバル親子、ミソラ、賢哉が話をしていた。

「あら、ミソラちゃん、泊まりに来てくれたの？遠慮せずにどうぞ」

「有り難うございます。それで寝る場所はどうするんですか？」

「家には空き部屋は無いし、布団も賢哉が使うし。」

スバルのベッドと一緒に寝るしかないわね。」

また、驚愕の発言、賢哉は、待つてましたとばかりに、

「それはいい考えだ。是非そうさせましょう！」

だがスバルは猛反対している。それは6年生の男子として当たり前のことだ。

「駄目だよ！年頃の男女と一緒に寝るなんて！」

「寝るところは、そこしかないからねえ。無理よ」

だが茜も対抗している。賢哉、茜の狙いはどちらも同じだ。だがスバルも引いてはいない。

「もし一緒に寝てしまったら、弱い僕はどれだけ理性が持つか分からない！だから僕は床で寝るよ！」

スバルは、妥当な理由を述べた。だが賢哉も負けてはいない。そしてこう言い返した。

「だったら ミソラに両手を押さえてもらえばいいじゃん。しかもお前が弱いだってえ？ 十分強いよ。サザンクロスと電波変換した俺をあそこまで追い詰めたもんない。あのとき負けるかと思ったぜ」

「んな無茶な、しかも弱いと言ってるのは僕的心だよ。」

3人は言い争いを続けていた。その時ミソラはまたまた驚愕発言。

「私は別にいいけど……」

スバル2回目の叫び

[illegible]

今度も大きかった全員耳をふさいだ。賢哉は、キレタのか、

「うるせえよ！本人が承諾したんだから、お前にどうこう言う権利は無い！負けを認める！俺もサザンクロスと寝るんだぞ。それ位ど

うってこと無いぞ。」

「私と寝るのが嫌なの……?」

『スバル君、女の子を泣かせちゃ駄目じゃないの』

「そうだぞ。お前は本当に鈍感だなあ。」

スバルがあまりにも拒否り過ぎたので、ミソラは遂に泣き目になってしまった。そしてウィザードオンしてきたハープと賢哉は、スバルを叱った。

「ミソラちゃん泣かないでよ……しょうがないなあ、分かったよ、一緒に寝てあげるよ。」

そしてスバルは遂に堪忍した。

「やった〜！ありがとうスバル君！」

「やっと認めたわね。スバル、偉いわよ。」

「（クッククククク！ベストショットGETだぜ!）」

『ミソラ、よかったわね』

4人は喜びの言葉を述べた。そして家にいる全員でご飯を食べた。食べている間、ウィザードたちはスバルの部屋で……

『スバル、あの女と寝るのかよ！傑作だぜ』

『まったくあんたはガサツねえ。』

話をしていた。だがハーブは、少し落ち着かない様子だった。

『おい、ハーブ、どうしたんだ？』

『何か、強力な電波体の気配がするのよ。』

ハーブが強い電波体サザンクロスの気配を感じていたのだ。しばらく沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは、ドアを開けたものだった。

『はーい、ハーブに会いに来たよー。』

『あ、貴女はサザンクロス！何でここに？』

その正体はサザンクロスだった。

『なんだ、ハーブが感じていたものはサザンクロスだったのかよ。』

『実はね、カクカクシカジカで……………』

『よかったわー。てつきり暴れに来たのかと思ったわ。』

ハーブはサザンクロスが此処に来た経緯を聞くと安心した。その後ウィザードたちで他愛も無い話をしていた。

ダイニングでは……

『全部食べ終わったみたいね。感心感心！』

「スバル君のお母さんご馳走様でした。」

スバル達はご飯を食べ終わっていた。もちろんミソラはご飯を7杯
おかわりしたのは言うまでも無いだろう。3人はリビングに行つて

「すごい食べっぷりだなあ。太るぞ？30kg（↑オリジナル設定）
と言う理想の体重が台無しだぞ？」

「賢哉君、何でそんなことまで知ってるの！！？秘密にしたのに
」。

「適当に言ってみただけだが。へえ、お前こんなに軽かったんだ。」

「くやしー！」

等と会話をしていた。賢哉の事は、食事の途中で知らされたらしい。
そこへスバルが口を開いた。

「お風呂入るよ。誰が最初？」

「俺が一番風呂」

賢哉が最初のようにだ

「なら次私！」

「最後は僕ね。」

順番が決まって、賢哉が先に風呂に入った。

ミソラとスバルは、部屋に入って、雑談をしていた。

「ミソラちゃん、そこまでして僕と寝たいの？先が思いやられるよ……」

「いいじゃんいいじゃん」

という風には他愛も無い話を続けていた。

10分後、賢哉が部屋に来了。風呂から上がったようだ。

「じゃ、私入ってくるね」

次はミソラが風呂に行った。

「おい、スバル」

「何？そんな顔して」

賢哉は真剣な顔つきでスバルの名前を呼んだ。だが内心では、また一つ何かを企んでいた。

「俺はゲームを通して、お前とミソラの行動を見てきた。だから、ミソラはお前をどう思っているのか、お前がミソラのことをどう思っているのか、俺には大体分かる。」

「どういうこと？僕とミソラちゃんはただの友達じゃあなかったっけ？」

「ふつ、確かに今はな。だが、お前がブラザーになる時言った言葉
「僕には君の気持ちが分かる。だから君の助けになりたい。」この
言葉は、同じ境遇にあったものにしか言えないんだ。

この言葉をミソラは宝物にしている。だが後ひとつ、芽生えた気
持ちがある。その気持ち、いつか分かるぜ。」

と、いう風に話してるうちにミソラが風呂から上がってきた。

「分かった。考えてみるよ。じゃ、入るよ」

スバルは、風呂に入って行った。

「?……何話してたの?」

「いや、何でもねえよ。」

賢哉はうまく誤魔化した。内心では少しずつもう一つの計画が進ん
でいる

「それよりミソラ。」

「何なの? 真剣な顔して。」

もう一つの計画は順調だ。

「俺はなゲームを通じて、お前とスバルの行動を見た。そしてお互
いをお互いがどう思っているのか、俺には大体分かる。だが互いが
気づいてないだけだ。」

「え? 私とスバル君はただの友達同士だけど……」

「あつそ、なら何故、お前はスバルと一緒に寝たいといった？そして何故シーサーアイランドでスバルの手を握った？」

『そうよ、ミソラはこの気持ちに気づいてるじゃない？』

ハープも狙いは一緒だった。これで戦力が増えた！

「それは……（この気持ちの意味が分かった。ありがとうハープ、賢哉くん）」

私がスバル君の事が好きだから……」

ミソラは顔を赤くしながらスバルへの気持ちを述べた。

「そうだ。お前はブラザーを結んだときから撃ちぬかれていたんだ。だから、ミソラ、次のデートで告白しろ。どんなことが起こっても気にするな。」

敵が来ても俺一人で戦う。」

「分かった。ありがとう。賢哉君、勇気が出たよ。」

その後スバルが入ってきた。

「皆入り終わったね。じゃ、寝ようか」

「そうだな。じゃ、俺はサザンクロスと寝るよ。ウィザードオン。」

スバルが確認した後、賢哉はサザンクロスと一緒に布団にもぐりこんで寝た。

「じゃあ僕達も寝ようか……」

「うん！」

そしてスバルとミソラは同じベッドに入った。だが、ここで問題発生！

「ミソラちゃん」

「何？」

「抱きつかないでくれる？」

何と、大胆なことにミソラはスバルに抱きついてきた。なんとも羨ましい光景。

「いいじゃんいいじゃん」

「その言葉何回目？眠れないんだけど……」

「zzzzzzzz」

スバルは体をミソラのほうに向けてみると、ミソラはもう眠っていた。まるでの●太のような早さだ。

「（寝るの早すぎ！でもミソラちゃんの寝顔可愛い……はっ、僕は何考えてるんだ？

でも可愛すぎて自分も抱きしめたい……ただ！あの時もつと断つてればよかったな……

あああああああ！もう限界！と言う訳でこの寝顔は……僕のもの！！ごめんなさい！！」

遂に理性が切れた弱いスバルは、ミソラを抱きしめてしまった。そしてそのまま寝てしまった。

前言撤回！賢哉は寝ているのではなく、ハンターをいじっていただけであった。そして、ベッドから体を起こし、スバルとミソラが寝たのを確認！

「（ハハハハハハハ！計画実行！）」

賢哉はハンターのカメラ機能のシャッター音をオフにして、スバルとミソラが抱き合って寝てるところを、何枚も撮った。

「（さてと、曉に送るか！メール画面で書いてから、送信！計画成功！俺も寝るか！）」

そして賢哉は、布団の中に入って寝た。

賢哉の計画（後書き）

暁の反応はどうなるんでしょうね……
感想待ってます

ミッション！学校に広める！

時は午後１１時。WAXAでは暁が残業していた。この時間は、暁、ヨイリーから渡された資料の整理をしていたのだった。

そばにはクインティアもいる。このクインティア、つい最近、暁の金とこねで釈放されたらしい、ジャックもだが。どこからそんな金と地位が出来たのかは、誰のも分からない。

だが交渉するのには、凄く苦労したのは、手に取るように分かる。それはもちろん、暁の、大切な人だからだ。どんな苦労も惜しまないほどに大切な人なのだ。そして今、二人で働いていると言っわけだ。

「面毒背」

「字間違ってるわよ。そんなギャグがましている暇あったら、働きなさい。」

シドウは字も変換しないほどめんどくさがっていた。字を変換してないのは作者だが。そんな間違いを気にしてはならない。その時……

P P P P P P P P

シドウのハンターからメール受信音が鳴った。シドウは面倒くさいな～と思いつつも、受信箱を開いてみた。

「送り主は、賢哉か題名は『いい画像あるぜ』か。何なんだろう？ 本文見よう。」

「暁へ」

残業で眠たいだろう？そんなときのために、俺が眠気も覚める画像を差し上げよう。

この画像をマスコミに見せるか、ゴン太に見せるか、お前が大事にとっておくか

お前の勝手だ。マスコミに見せたら恐ろしいことが起こるから、マスコミには見せないほうがいい。

それと今日トレーニングでスバルと戦ったら、メテオGが無いのにファイナライズした。

それについては明日調べてくれ。

賢哉より』だってさ。すごい画像が入ってるかも。送付されている画像データを見ようか。」

シドウは恐る恐る画像データを開いた。するとそこにはとんでもない物が見えた。そしてシドウは部屋中に響き渡るほど大きな声で叫んだ。

「スバルとミソラがーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

抱き合って寝ていた写真だった。フラッシュたいたので結構明るく見えた。だからシドウには一瞬で分かった。どんな恐ろしい写真なのか。そしてクインティアが急いで駆けつけてきた。

「ティア、この写真を見てみる！恐ろしすぎるぞ。羨まし過ぎるぞ！」

「どんな写真かしら……エッ!!?スバル君とミソラちゃんが抱き合って寝てる。まだ小6なのにこんな事を！流石だわ……!!」

クインティアもシドウほどではないが驚いている。あんな羨ましい光景を見たシドウはどんな結論を出すのか……？

「この画像データ、コピーして……ゴン太に送る！本文書いて、画像のコピーを送付、そして送信！ゴン太からルナ、キザマロに写真を送れば、学校中に広まるぞ。楽しみだ。」

「スバル君、ミソラちゃんを幸せにしてあげて……」

「ついでに明日、遊撃隊呼ばないと」

シドウは悪戯で学校中に噂を広めようとしている。一方クインティア、スバルとミソラの関係に期待している。どういうこった。

一方ゴン太家では

ゴン太は部屋でゲームをしていた。もちろん牛丼クエストだ。なんという夜更かし！

「行くぞー」「七味ぶっ掛け！」よし一撃で倒したぜ。」

等と掛け声を上げていた。そのせいで親が眠れないのは言うまでも無いだろう。その時ハンターから

[illegible]

メール受信音が鳴った。

「何かメール来たみたいだ。 暁さんからだ。 どれどれ？ ミッション！ 今送った画像を学校中に広めろ。」

本文は、
ゴング太へ

この画像は凄く羨ましい画像だ。学校中に広めない手は無いぜ。だから今送った画像を白銀ルナと最小院キザマロに送ってくれ。だつて。」

そしてゴン太は送付されている画像を見た。

それを見てゴン太は口をあんぐり開け、何も喋らずにいた。

[illegible]

そして無言でメール画面を操作して画像をコピーし、本文書いて、コピーした画像を送付してキザマロとルナに同時送信した。

一方ルナ家では、ちょうどルナが塾から帰宅したところだった。

「ふゝ疲れたわ。まったくなんで三つも塾を回らないといけないのかしら。」

委員長ことルナは塾帰りで、愚痴をこぼしている。三つもまわった

ら流石にしんどくなるだろう。だがそうすることで、エリートになり収入も増えるが、性格が駄目になってしまう。

両親はルナにやらせていることの重大さを全然分かってないようだ。頭がいいより普通の人間の感情を持つてるほうがもっと幸せに出来る。

そう愚痴をこぼしている内にメールが来た。

P P P P P P P P P P P P P P P P

「メールだわ。送り主は、ゴン太。件名は「学校に広めてくれ」ですって。本文は

『委員長へ

俺と暁さんは恐ろしいものを見てしまった。だから、この画像を送る。

キザマロにはもう送った。これを学校に広めてくれ。

ゴン太より』ふん、結構、慌ててるようね。ちょっと見てみようかしら。」

ルナは送付されている画像を見た。すると一瞬だけ周りに黒いオーラを放ち、怒りをこめて叫んだ。

「キ~~~~~

ッ！！！！！何なのこれは！！！？こんなこととして許されると思わないでね！絶対に学校へ広めてやるわ！！」

そしてルナはメール画面を操作して画像のコピーを何枚もコピーして、キザマロ以外のブラザー全員に送信した。クラス全員といっていいだろう。委員長なのだから。

これで学校中がパニックになること間違いなし。そしてコダマタウ

ン中に叫び声が響き渡った。

ミッション！学校に広めろ！（後書き）

凄いですね！

感想待ってます！

学校へ

翌朝、午前6時。スバルの部屋。ミソラは仕事で早いので先に目を覚ました。因みに賢哉は早起きなので4時に目を覚ました。

「起きて仕事行かないと……あれ？」

ミソラは目を開けたとき、

「す、スバル君!!?」

そう、ドアップのスバルの顔が見えた。しかも抱き疲れているので身動きが出来ない。さすがにミソラはこの状況に驚いている。

「どうしよう!仕事遅れちゃう!」

慌てふためいてるとき茜がやってきた。ミソラもスバルを抱きついている状態である。

「ミソラちゃん!仕事で早いでしょう?だからおきなさい……
ってあら!？」

そう、抱き合っている状態を茜に見られてしまったのである。

「スバル君を起こしてもらえませんか？」

「全く!スバルったら。でも可愛いわね!じゃ、起こすわよ。スバル!今の光景キツチリ見てるわよ!早く起きなさい」

茜が大きな声を出して、スバルを起こした。するとスバルは目を覚ました。

「ん？母さん？（あれ？僕がミソラちゃんに抱きついている。それを母さんが……）ええええええええ！！？」

「どういふことか、教えてもらおうかしらねえ」

茜はニヤニヤしながら言った。そして6時にもかかわらず二人は起きて、スバルは着替えてから、1階へ向かった。

1階では飯を食べ終わったのか賢哉と大吾がテレビを見ている。因みに今日、賢哉は学校に行くことになっている。

スバルとミソラは食卓についた。二人は顔を真っ赤に染めている。そこへ茜はさらに追い討ちをかけた

「さてスバル、これがどういふことか説明してもらおうわよ。」

そこまで茜は嫌味な人なのか？と思うスバルであった。一方ミソラは恥ずかしくて顔を上げられない。

「分かりましたよ！言いますよ！寝ている途中で我慢出来なくなつて遂にやってしまったんです！ミソラちゃん、許してください！」

遂にスバルは開き直った。茜は驚いて黙り込んでいた。そしてしばらくした後リビングにいる賢哉と大吾が口を開いた。

「はっはっは！スバル、そういうことは誰にだってあるさ。気にすんな」

「まあいいんだ、スバル。これでよかったんだ。（暁どうしたんだ

ろっ、あの写真)」

大吾と賢哉はあっさり許してくれた。賢哉だけワケありだが。後は、ミソラが許してくれるのを待つだけ。その時ミソラが口を開いた。

「スバル君、別にいいの。気にしないでいいよ。わがまま言った私も悪いんだし。（本当は嬉しかったな）」

ミソラも以外と簡単に許してくれた。いや、寧ろ嬉しがっていた。と言う風なやり取りをしているうちに、二人は朝食を食べ終わっていた。

「「ご馳走様でした」」

「賢哉、スバル、学校に行く準備しなさい。ミソラちゃんは仕事に行ってもいいわよ。」

「スバル君のお母さん、お世話になりました。じゃ、行ってきます。」

ミソラは外に出て行った。スバルと賢哉は学校の準備をしに、二階に行った。数分したらスバルと賢哉が降りてきた。賢哉は新品のカバンを持っている。

「母さん準備できたよ。」

「茜さん、俺も準備できたぜ。」

「賢哉、新品のカバン、似合うわね」

と言う風に茜は賢哉をほめていた数十分したら、呼び鈴が鳴った。

ピンポン

「あ、委員長達が来たみたいだ。行くよ賢哉君。」

「ああ。行こう。」

そして二人はドアを開けた。するとそこには、鬼の形相をしたルナが家の前にいた。ついでにゴン太、キザマロ、そしてジャック、ツカサまでいた。

「あ、あの委員長？どうしたの？」

スバルは恐る恐る尋ねてみた。すると、ルナはハンターを操作して画像ファイルを開いて一つの画像を見せた。

「スバル君、これはどうしたの？ ゆっくりと学校で話を聞かせてもらうわ！」

「ひ〜〜〜〜〜〜〜ッ（何で委員長がこれを持
っているんだ？）」

そしてスバル達は学校に行った。

学校へ（後書き）

この後大変なことが起こります。
感想待ってます。

クラスの叫び

スバル達は、数分歩いて学校に着いた。

「星河達、お早う！賢哉君、ツカサ君、ジャック君、君達は職員室にいてくれ。」

玄関で挨拶してきたのは、スバル達の担任、育田道德だ。道德は、賢哉、ジャック、ツカサに職員室にいるように言ってから、スバル達とともに、教室に向かった。

「起立！礼！これから朝のHRを始めます。座ってください。」

と言うルナの掛け声とともに児童達はHRを始めた。最初に先生の話からだ。

「まず新しい仲間になる生徒を紹介する。」

先生のこの一言で、生徒達はざわざわし始めた。これを先生が止めて転校生を教室に入れた。

「では入ってきてください。」

すると、賢哉とツカサとジャックが入ってきた。

「俺は綿澄賢哉。簡単に言えば異世界からやってきた。よろしく。そして、ウィザードオン。こいつが、俺のウィザード、サザンクロスだ。」

「サザンクロスです。FM星から来ました。よろしくお願いします。」

何と賢哉は自分が異世界から来たと言つて、ウィザードまで紹介する暴挙に出た。クラスの人にはポカーンとしている。先生が「はい拍手」と言つてやっと拍手してくれた。多分賢哉はこの後質問攻めにあうだろう。

「僕は双葉ツカサ。いきなりどこか遠くに行つて皆に心配かけさせてごめんね。一年間よろしく」

「ジャックだ。前は迷惑かけて済まなかった。これからは此处で過すのでよろしく。」

ツカサとジャックには拍手喝采だった。そのせいで賢哉は機嫌を損ねた。

「では3人は好きな席に座ってください。」

そして、3人は各自、自由な席についた。

「では先生は職員会議があるので、休憩にしてくれ」

休憩時間になった瞬間、男子、女子全員がスバルに向かってハンターの画像を見せ、襲い掛かってきた！

「……………これはどういうことなんだ（かしら）……………！！！！！！！！！！……………」

全員はスバルを凄い目で見た。スバルは見せられた画像を見ると、

「何故これがみんなに〜〜〜〜！！！！？」

スバルは賢哉を見ると腹を抱えて笑っていた。自分がこんなことになっているのだから面白がってるだけだろうと思って気にしなかった。だがそんなことを考えてる内に全員から火の粉が降りかかった。結果スバルは、質問＆罵声＆バイオレンス（暴力）攻めを食らった。その後スバルは精神的に重症を負い先生に勧められ相談室に行ってカウンセリングで愚痴を言いを受けに行った。そして、1時限目、2時限目が終わり、生徒達は休憩についていた。賢哉は、もちろん質問攻めを受けていた。

「ねえ賢哉君、本当に異世界からきたの？」

「このウィザード、可愛い〜！」

「あゝ、もう押しかけないでくれ。並んで並んで、一人ずつ。」

賢哉は必死に皆を落ち着かせていた。それでも皆は離れなかったの
で、賢哉は遂にキレタ。

「あゝ！！うるせえ！！とつとと散れ！群がるな！！！」

賢哉は皆に怒鳴って、皆を黙らせた。

そして3時限目のチャイムが鳴った。その時！

いきなり外から爆発音が鳴った！

クラスの叫び（後書き）

敵が来ました！
感想待ってます。

学校への敵襲

3時限目のチャイムがなった瞬間、突然グラウンドから爆発音がした。それに気づき賢哉、スバル、ゴン太、ジャック、ツカサは急いでグラウンドに行った。

グラウンドでは一人の黒い髪の青年が地面を破壊しまくっていた。だがウォーロックたちウィザードは、

「スバル！こいつからは人間の気配が感じねえぜ！」

何と、この男も電波体だ。賢哉は男に

「てめえ！何学校の敷地壊してやがる！！？」

と言った。男は此方に気づいたのか、

『来たか。こうやって大きい音出せば、お前達がやってくると思つてね。俺の名前はジリア。あの方に作られ、お前達を抹殺しに来た。電波変換！』

ジリアは、電波変換した。するとジリアは黒い光に包まれ、全身黒いアーマーに覆われ、右手には黒い槍。頭には2本の角が生えていて、背中には黒い翼が生えている、悪魔を想像させる電波体が姿をあらわした。

『この姿こそジリア・ルシファーだ！あの方の命によりお前らを地獄に送つてやる。』

「へっ！誰だか分からないが、お前を倒して、お前らの正体、吐か

せてやる!!」

どうやらジャックも本気なようだ。そして5人は、ハンターを掲げ電波変換した。

「トランスコードXXX!サザンクロス・ロックマン!」

「トランスコード003!シューティングスター・ロックマン!」

「トランスコード005!オックス・ファイア!」

「トランスコード006!ジェミニ・スパーク!」

「トランスコード007!ジャック・コーヴァス!」

光の中から現れたのは5人の戦士たち。だがジリアルシファアは余裕の表情を浮かべている。

『まとめてかかって来い。地獄を見る覚悟があるならな』

「地獄を見るのはお前のほうだ!レッドレーザー!」

ここでSCロックマンがまっすぐに伸びる赤いレーザーを放った。だが、ジリア・ルシファアは翼を羽ばたかせ飛んで軽々避けた。

『甘いぞ。ジリアスピアー!』

SCロックマンは真正面から突きを食らおうとしたその時、

「ロックバスター!」

SSロックマンが突き攻撃をしようとしているジリア・ルシファーに、バスター攻撃を食らわせた。

「チッ！やるな……フェザーウィンド！」

ジリア・ルシファーは翼を羽ばたかせ、風を起こし、二人を吹き飛ばした。

「グアーーーーッ」

二人は数メートル離れた地面に叩きつけられた。二人は直ぐに立ち上がり構えた。だがジリア・ルシファーがさらに追い討ちをかけた。

『まだまだ！お前達に地獄を見せてやる。ブラックフェザー！』

ジリア・ルシファーは黒い羽を何発も二人に向かって放った。だが、

「ファイアブレス！」

「ジェミニサンダー！」

「ペインヘルフレイム！」

3人の攻撃により羽は全て破壊された。

「『今だ！スバル（君）！』」

「分かった。バトルカード！ソードファイター、マヒプラス！」

「ジェネレーター起動！包囲しろ！そして、メテオレーザー！」

SCロックマンがジェネレーターを動かしている間にSSロックマンはソードファイターで相手を麻痺らせてからSCロックマンは1箇所だけに目標を集中させ降り注ぐメテオレーザーを放った。

『ガアアアアアアアアアアア！』

爆煙が晴れた後、そこには、傷だらけのジリア・ルシファーがいた。だがまだ戦えるみたいだ。

「まだ戦えるなんて……バトルカード！バルカン！」

SSロックマンは止めを刺そうとバルカンを撃ったが、ジリア・ルシファーは避けた。

『まだア……お前達に……地獄を見せてないiiiiiiiiiiiiいいい！ダークネスルシファー！！』

ジリア・ルシファーは頭上に手を掲げ闇の塊を作った。そしてそれを投げつけた。それは5人に直撃した。

「…………グア…………ツ！！！！！！」

5人は叫んだ。爆煙が晴れたらそこには、倒れているSSロックマン達がいいた。だが倒れているのは、4人。そう。SCロックマンが生き残っていた。

「俺達にこんな目にあわせたから、罰として、お前に地獄を味わってもらおう。ジェネレーター起動！一つはジリアの真上に。後は包囲

しろ。」

そしてジリア・ルシファアの真上にあるジェネレーターからレーザーを放った。だがそれは当然ずジリア・ルシファアの周りをぐるぐる回った。

そう、レーザーで閉じ込めたのだ。そして残りのジェネレーターと、SCロックマンの手のひらから極太レーザーが放たれた。

「これが俺の新技！クロスメテオレーザー！」

「一つだけ教えてやる。あの方はアンドロメダの鍵を狙っている。ではさらばだ。グアアアアアアアアアアア！」

そして、ジリア・ルシファアは跡形も無く消えた。

学校への敵襲（後書き）

F M 星狙われますね。

感想、待ってます。

ウィザード達のウェーブバトルとスバルと賢哉のリアルバトル

その頃FM星では……

『大変です！FM王！アンドロメダの鍵が何者かに奪われました。ついさつき後を追いかけて、殆どに逃げられましたが、一人捕まえました。しかし、そいつは人間の姿をした電波体です。いかがいたしましょうか？』

FM王の部下が大急ぎでFM王に駆けつけて今起こったことを伝えた。それを聞いたFM王の顔は青ざめている。

『大変なことが起こった。捕まえたものから話を聞け！よも今行く！』

FM王と部下は急いで捕まえたものがいるところまで駆けつけた。

『そち達は何故アンドロメダの鍵を奪った！！？理由を聞かせろ！』

FM王は怒りまじりで捕まえた人間の姿をした電波体に聞いた。

『……………』

人間の姿をした電波体は黙ったままである。どうやら、理由は極秘事項らしい。それに怒ったFM王は捕まえた者に念力を食らわせた。

『ギアアアアアアアアアアアアア！ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……』

F M王は再度能力を使おうとしたとき、

『分かった！今言う。だから殺さないでくれ。』

捕まえたものは遂に堪忍した。

『俺達は、ノイズウェーブを通って此处まで来た。何の為にアンドロメダの鍵を奪ったか。それは地球の人間を全て消して、この地球の歴史を0から始めるためだ！』

『（このままじゃ地球のブラザーが危ない！）親衛隊全部隊の隊長は今すぐ地球に向かえ！地球が危ない！よも行く！F M星の政治とA M星の復興はA M3賢者に任せる！この犯罪者は牢に入れておけ！』

捕まえた電波体を牢屋に入れた後、F M王と親衛隊の全隊長は地球に向かう準備をし始めた。

その頃地球では……………

『ボス！F M星からアンドロメダの鍵を奪いました。』

「それはご苦労だった。後はオーパーツと、負のエネルギーだな。先ずは負のエネルギーを集める。」

『ハッ！お仰せの通りに！』

そう言って電波体はどこかに消えていつてしまった。

コダマ小学校

5人はジリア・ルシファーを倒した後、6間目も終わって放課後、教室で話をしていた。委員長達は先に帰ったらしい。

「いててて！本当にアイツはタフだったな。」

賢哉も結構ダメージを負ったらしい。だが、ほかの4人も同じようにダメージを負っている。

「それにしても賢哉君、よく立てたね……」

スバルは賢哉が立てたことについて疑問に思っている。賢哉はそう答えた。

「諦めないことが大切なんだ。取っ組み合いの喧嘩もどれだけ倒れても、何度も立ち上がるんだ。それは何故か。それは絶対にこいつだけは倒してやる！っていう「意思の力」が働いているからなんだ。それにジャック、ツカサ、何故電波変換できるんだ？ジエミニはともかく、コーヴァスは、ブライにデリートされたんじゃない……」

賢哉はそれらしい理由を述べてから、ジャックとツカサに何故電波変換できるのか聞いた。

「それはな。俺のハンターにコーヴァスの残留電波が残っていて、それを特別に再構築してしまったんだ。今はもう悪いこと等考えねえ。」

『ようよう！ウォーロックちゃんよオ！復活してやったぜ！？』

『おい！ちゃん付けするの止めろ！またデリートされたいか！？このカラス！』

『ハッ！あの時は油断してたんだ！お前等いつでもデリートできるぜ！ウォーロックちゃん！』

『デメエ！ウェーブバトルしやがれ！跡形も無くデリートしてやる！場所はトロフィーの電腦だ！俺に負けたら焼き土下座だ！俺に勝てたら、うまい棒1本やる！』

『お前！不公平すぎるぞ！デリートしてやる！ウォーロックちゃんちゃん！』

等と二人の電波体はギャグを混ぜながら喧嘩をしていた。その間にツカサが理由を話した。

「僕は此処に来る前ジェミニの残留電波を使ってヒカルを封印するための修行に出てたんだ。最終的にはヒカルと分かり合えただけなんだ。その後ジェミニの残留電波を曉さんに再構築してもらったんだ。」

そのついでにヒカル的人格もジェミニに移動したんだ。」

『おい！コーヴァスとウォーロック！俺を差し置いて何ウェーブバトルしようとしている！俺も入れろ！』

ウォーロックとコーヴァスは、ジェミニに気づきジェミニの顔を見た。そしてすごい勢いで爆笑した。

『ギャハハハハハハハ！ジェミニ、顔一つしかねえ！ふたご座じやなくて、一人っ子座だ！ヒー、ヒー！腹いてえ！』

『ハハハハハハハ！ジェミニちゃん！顔一つしかねえ！ある意味恐ろしい！！これじゃあ台無しだ！』

ウォーロックとコーヴアスは喧嘩をいったん止めてジェミニの顔が一つしかないことを笑っていた。ジェミニはとうとうキレて、

『テエエエエエエエエエエメエエエエエエエエエエアアアアアアアアアア！！！！！まとめてかかって来い！ぶっ潰してやる！』

『ウルセエ！一人っ子座のFM星人！』

『何度言ったら気が済む〜〜〜〜！！！！？』

『2回しか言ってねえ』

『ブロロロロ！俺を差し置いて何喧嘩している！？』

『黙れ！！プルコギセキ！（韓国語で焼き肉野郎。それがプルコギ野郎）』

『韓国語で言いやがって！許さんぞ！これで全員揃ったからウエー
ブバトルしろ！』

『行くぞー！！！！！！』

4人のウィザード達は今にもバトルしようとしてたが、思わぬ事態

が起こった。

『バトル！？やったーッ！私も入れて！』

サザンクロスが乱入してきた。

『『『『な、なら、4対1だ』』』』

そしてウィザードたちはトロフィーの電腦に入って行った。4人とモロボロになって帰ってくるだろう。サザンクロスによって。それにスバルは呆れている。

「はは、行っちゃったね。まったくウォーロックは好戦的なんだから……」

「サザンクロスが目を覚まさせてくれるさ。」

「そろそろ帰らなきゃ」

そして5人は一緒に帰り道についた。10数分して、スバルと賢哉は家に着いた。家に入ると茜がテレビを見ていた。夕方のドラマ「ラミソ女刑事の事件簿」だ。

このドラマは響ミソラ主演の大ヒットサスペンスドラマだ。主演が子供なので内容が賢哉から見ればあ○パン○ンより幼稚だ。だが賢哉はそのことは敢えて伏せておくことにした。

一体全体こういうドラマに出ているミソラはどういう心情を抱いているのだろうか。賢哉には分からない。そして二人は2階へ上がつて話をしている。

因みにウィザード達はこの時点でサザンクロス以外モロボロになって帰ってきている。サザンクロス曰くメテオレーザーで一撃で倒し

たらしい。そして今に至る。

「賢哉君、君の世界ってどうなっているの？」

スバルは賢哉に賢哉の世界の事を聞いてきた。だが賢哉はただ考え込んでいる。そして出た答えが、

「済まないが何故か俺の世界の記憶が無いんだ。覚えているのはゲームで知ったお前達のことと俺の名前だけだ。」

そう、賢哉は記憶が消えているのだ。

「話は変わるが、何で、お前とミソラが抱き合って寝ている熱々の写真が皆に行き渡っていると思う？」

ネタバラしの予感。

「さあ、分からない。まさか、賢哉君？」

そして賢哉は懐から一枚のIDカードを出した。

「そう。俺はサテラポリス（暁）、WAXA（大吾）公認のスバルミソラストーカーだ。驚いただろう！？」

何と賢哉は昨日WAXAに行ったとき、スバルミソラのことを知っていると言う理由でストーカーになっていた。その時、ブチッと血管が切れる音がした。

「賢哉君、

表へ出て……電波変換無しで君を殴りたくなってきた。ウェーブバトルならぬ「リアルバトル」しようよ」

スバルは遂にキレて、無表情で賢哉に恐ろしいことを言った。流石に賢哉も引いた。だが腹を決めたのか、

「いいぜ。受けて立つ。かかって来いよ。」

かくしてリアルバトルが始まる。

ウィザード達のウェーブバトルとスバルと賢哉のリアルバトル（後書き）

面白くなってきました。

負のエネルギーってどうやって集めるんですか？

感想待ってます。

リアルバトル、ライド・オン！

場所は展望台、此处では二人の男が睨み合っていた。

「君のせいでこんなに恥をかいてしまったんだ。だからその恨み晴らさせてもらうよ……」

スバルの目はもう死んでいる。明らかに賢哉をぶん殴ることしか頭に無いようだ。

「お前の気持ちは分からないこともない。だが俺はストーカーを続けなければならぬ。なんたって、大吾さんと、暁の期待を背負っているからな。では、始めるか。」

二人は構えた。スバルからはすごいオーラが湧き出ている。

「リアルバトル、ライド・オン！」

そして遂にリアルバトルが始まった。まずはスバルから仕掛けてきた。1回ゴン太に浴びせたことのある、アップーだ。

「これが僕の恨み、デストロイアップー！」

勝手に名前までつけた。そのアップーは見事ヒットした……賢哉の手のひらに。

「甘いぞ！でやああ！」

賢哉はスバルの腹にキックを浴びせかけた。それを食らってスバル

は怯んだ。だが直ぐに体勢を直した。

「ぐっ！強いね……これはどうだ！」

スバルは賢哉に向かって走り出した。賢哉はスバルが何するか分からない。なので防御体勢に入った。

そしてスバルが賢哉の目の前に来たとき、なんとスバルは蹴りをかました。

「うおおおおおお！」

その攻撃は見事賢哉の脚にヒットし、転ばせた。

「ぐあっ！チクショウ！」

そしてスバルは賢哉に追撃しようとしたが、賢哉は寝ながらのキックをスバルに当てた。

「俺が倒れたからって油断するな。ハアッ！」

そして見事攻撃はスバルにヒットし怯んだ。その隙に賢哉は立ち上がり、怯んでいるスバルを殴って倒した。そして賢哉は倒れたスバルの上に乗った。

そしてその後は取っ組み合いが続いた。取っ組み合いから何とか逃れたスバル、そして賢哉も立ち上がり止めをさそうとして、両者走り出した。

「君には絶対に負けない！はあああああああ！」

「お前と喧嘩できて楽しかった。だがこれで終わりだ。うおおお

「おおおおお！」

そしてスバルは賢哉の顔面にパンチを、賢哉はキックをかました……

スバルの大事なところに……

その後暫し停止した。スバルがパンチを賢哉の顔面にヒットさせた状態と賢哉がスバルの大事なところにキックをヒットさせてる状態で。

そして賢哉は鼻血が出て悲鳴をあげて倒れた。スバルも悲痛な声をあげて倒れた。

それからしばらくたち、立ち上がるうとした時、二人のハンターからメールのメールの受信音が鳴った。

P
P
P
P
P
P
P
P
P
P
!

二人はハンターを取り出したて受信箱を見た。

「暁さんからだ。読んでみよう。」

「このメールは遊撃隊員全員に渡してある。今すぐWAXAに來い。」

暁シドウ』

だって、じゃ、行こう。ぶん殴ったらすつきりした。

「じゃ、行こうか。あそこ蹴ってすつきりしたし」

そして二人はウェーブライナーに乗った。

ウェーブライナーでは、二人は仲直りしていたと言う。結局賢哉はストーリーを続けることになったが。まるで兄弟のようだ。

そして二人はWAXAに着いて、指紋照合等を済ませて、扉の中に入った。扉を開けるとシドウが待っていた。

「よう！スバル！ミソラとは、アツアツだな」

前の件についてシドウはスバルをからかった。

スバルは顔が真っ赤になった。

そしてシドウ含む3人で部屋に入って行った。そこにはジャック、ゴン太、ミソラ、ツカサヨイリー、大吾がいた。

「ようスバル、賢哉。傷だらけだがどうしたんだ？」

「ようスバル、賢哉。傷だらけで疲れたときは牛丼だぜ。後でござってやるうか？」

「こんにちは！スバル君、賢哉君。あのこときのこと暁さんにはれちゃったみたい。」

「待ってたよ。スバル君、賢哉君。あらかた喧嘩でもしたんでしょ？仲がいいね。」

「スバルちゃんと賢哉ちゃん、待ってたわよ。」

「スバル、賢哉、傷だらけだな。原因は分かるぞ。お前達もうすっかり兄弟だな。」

等と口々に喋っていた。スバルと賢哉は、お互い顔を見合わせ、

「ぶっ！ギャハハハハ！」

「くっ！ぷぷ！ははははははは」

と笑いあつた。本当に仲がいいようだ。兄弟みたいに。

「では此処で本題に入る。」

と、シドウが言った。そして会議が始まった。

リアルバトル、ライド・オン！（後書き）

短くてすみません！
感想待ってます。

会議

「では、本題に入る」

シドウの言葉で、一同は、静まり返った。そしてシドウは、口を開いた。

「まず、スバルのことだ。」

シドウは、まずスバルのことを話すらしい。そして口を開いた。

「昨日の夜、賢哉から、一通のメールが来たんだ。一枚の画像と一緒に。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にしていた。それを賢哉とシドウは、笑いを堪えながら見ていた。次にシドウはスバルとミソラの反応を面白がるように、こう言った。

「その画像と言うのが、実はこれだ。」

シドウは、モニターを操作して一枚の画像を出した。それは、スバルとミソラが同じベッドで抱き合って寝ている、なんとも羨ましい光景だ。

ジャックとツカサは初めてこの画像を見たようだ。ジャックはニヤツと笑っている表情をしていて、ツカサはマイペースにへらへら笑っていた。

「おいスバル、同棲はよくないぞ!」

「スバル君結構大胆だね。羨ましいよ」

と、スバルをからかっていた。それに対しミソラはもつと顔を赤くして顔を上げれなくなっていた。スバルはもつと顔を赤くして、涙まで流していじけていた。

「どうせ僕なんて……うつ……僕なんて……ひつく……って暁さん！話し逸らさないでくださいよ！」

「悪い悪い。賢哉からのメールの本文の最後のほうに、スバルとトレーニングしていたらスバルがファイナライズした。と書いてあった。だからそれを調べるためにスバルを呼んだ。スバル、ハンターをヨイリー博士に渡せ。」

そしてスバルはヨイリーにハンターを渡した。

「スバルちゃん、ハンターはしばらく預かるわね。じゃ、調べに行ってくるわ。」

そしてヨイリーはメインコンピュータールームに入って行った。そして暁は二つ目の話題を出した。

「そして、皆に変わったことがないか、聞きに此処へ呼んだ。まずミソラから。」

ミソラはシドウに言われて席を立った。

「私は特に何もありません」

どうやら、ミソラは、何も無いようだ。

「次、スバル」

「僕も特にありません。」

スバルも無いようだ。暁は、ゴン太、ツカサ、ジャックに同じような質問をしたが、皆同じ答えた。

「最後は、賢哉、お前だ。」

暁に言われて賢哉は席から立った。そして驚愕の報告をした。

「俺は有ったぜ。ジリア・ルシファーって言う電波体をデリートする直前、そいつは俺に向かってこう言ったんだ。「あの方は、アンドロメダの鍵を狙っている」って。」

その瞬間スバルと、暁とジェミニ以外のウィザード全員が、驚いた。

「アンドロメダの鍵が……ケフェウスが危ない……」

スバルが言った瞬間、警報が鳴った。

ビービービー！WAXA上空から電波体の反応を16体確認しました。遊撃隊員は直ちに現場に向かってください！それ以外の人は避難してください。

「おい、皆、今すぐ外に出ろ！スバルも一応ついてこい！」

皆は暁の指示で外に出た。外では、16個の流れ星が空にあった。

「皆、電波変換だ！」

皆は暁の指示に従い、スバル以外は、ハンターを掲げ、電波変換した。

「トランスコード！」

「XXX！サザンクロス・ロックマン！」

「001！アシッド・エース！」

「004！ハープ・ノート！」

「005！オックス・ファイア！」

「006！ジェミニ・スパーク！」

「007！ジャック・コーヴアス！」

6人は光に包まれ姿を変えた。

「皆、構えろ！」

アシッド・エースは、皆に構えるように言った。だが、ウィザード達がそれを止めた。

『この波長……敵じゃないみたいね。』

サザンクロスは敵じゃないと告げた。

『確かに……ね。』

『あの波長は……まさか!』

『間違いねえ』

上からハープ、オックス、コーヴァスだ。そして、ジェミニ以外のウィザードは同時に叫んだ。

『『『FM王だ! (よ) (ね)』』』』

そして、16体の物体は地上に降りてきた。降りてきたものは、こう言った。

『久しぶりだな。スバル。地球のブラザー……』

そう、ケフェウスだ。

会議（後書き）

F M 王来ました。
感想待ってます。

F M王の話と賢哉の話

「ケフェウス！」

先ずは、スバルが声をあげた。そう、ケフェウスは、以前キズナクルーからのブラザー申請信号を敵対信号と間違え、宇宙船を破壊し、地球を侵略しようとした張本人だ。でもスバルにそれを阻止され、絆の大切さを知って、今は、地球との交流を深めている。

「久しぶりだな、スバル。電波体たちも元気か？波長からして此処にいるのはウォーロック、ジェミニ、ハープ、コーヴァス、オックス、そしてこの波長は、サザンクロスだな。」

「ケフェウス、何かあったの？」

「よう、F M王。久しぶりだな。」

「お前がF M王かあ。だが俺はジェミニではなくて、ヒカルだ。」

「ご無沙汰してますわ。F M王。」

「よお！F M王ちゃん！言っとくが、俺は何も悪いこと等考えてない。安心しろ！」

「お久しぶりです。F M王、お体の調子はどうですか？」

「久しぶり、F M王。覚えてたかしら？」

上から、ケフェウス、スバル、ウォーロック、ジェミニ、ハープ、

コーヴァス、オックス、サザンクロスの順に言った。もちろんケフエウスは、皆元気なことに、喜んだ。だが何よりも喜んだのが、

『サザンクロス、友達が出来たのか？』

「俺がサザンクロスの友達の綿澄賢哉だ。ケフェウス、安心しろ。もうこいつは、暴れはしない。」

『そうか、よかった。サザンクロスをよろしく頼むぞ。賢哉。』

そして、その後FM星人一行は、WAXAの会議室の中に入ってしまった。そこにはWAXA長官がいた。

「FM王、どんな目的で此処に来たのですか？」

早速、1同は席についたらWAXA長官が話しかけてきた。ケフェウスはそれに答えた。

『実は、電波兵器であるアンドロメダを閉じ込めた、アンドロメダの鍵を地球の電波体に奪われたのだ。そして、親衛隊の全隊長を引き連れて、地球に来た。』

ケフェウスが言った瞬間、長官の顔が険しくなった。そして長官はこういった。

「FM王、残念ですが、手掛かりがありません。これからどうしますか？」

『我々は各地を放浪して、波長の合う人間を探す。そうしながら、アンドロメダの鍵を探す。WAXAは、出来るだけ、情報を集めて

くれ。』

どうやらFM王達は、波長の合う人間を探し、戦力を増やししながら、アンドロメダの鍵を探すようだ。WAXA長官は、それに対し、納得したかのように、

「分かりました。手を打ちます。FM王一行は、今から波長の合う人間を探してください。此方は、情報を集めます。」

『有り難う。では行つて来る。皆のもの、解散!』

そして、FM王達は波長の合う人間を探すためにどこかへ行った。そして、スバルはヨイリー博士のところに行った。

メインコンピュータールームそこにはでかいコンピュータが置いてあり、凄く物々しい。そこにヨイリーがいた。

「ヨイリー博士!ハンターはどうなったんですか?」

スバルはヨイリー博士にハンターの事を聞いた。ヨイリーはコンピュータの操作の手を止めスバルに告げた。

「今終わったところよ。結果を知らせるわ。」

スバルは緊張している。壊れていたら元も子もないからだ。

「スバルちゃんのハンターを調べてみたけど、エースPGMの中に小さいサーバーが出来たの。多分メテオGの中にいるせいでエースPGMが、大量のノイズを浴びてしまって、中にノイズのサーバーが出来たみたいなの。しかも高濃度のノイズを浴び続けたことに

よって、ノイズ耐性が、もっと強くなったの。大体、5000%まで耐えられるようになったわ。」

この答えにスバルは非常に驚いた。ノイズ率5000%まで耐えられるようになったからだ。これでファイナライズがもっと強化されるようになる。このことは、後の戦いにも影響する。

「本当ですか！？すごい！これで後の戦いが有利になる！」

スバルは本気で喜んでいた。そしてヨイリー博士が、険しい顔つきになって言った。

「5000%でファイナライズしたら、どうなるか分からないの。だから十分注意してね。」

「分かりました。ではそろそろ行きます。」

スバルはヨイリーからハンターを貰った後、メインコンピュータールームから出て行った。その頃、賢哉は、ミソラを呼んでいた。

「おい、ミソラ、ちょっと来てくれ。」

そう言った後、遠くにいたミソラが気づいたのか賢哉のほうへ駆けていった。

「何なの？用でもあるの？」

「ああ、言いたいことがあるんだ。ちょっとこっちへ。」

そして賢哉とミソラは、別室に入った。

「言いたいことって何？」

ミソラはそういうと、賢哉が答えた。

「お前、親がいなくて、一人暮らしだろう？」

「まあ、そうだけど。」

賢哉はミソラが親無しだということを知っていた。

「そしてほかの人は、お前のことをただのアイドルだとは思っていない。これも分かる。」

「うん。そうなんだ。私を一人の女の子として見てくれるのは、スバル君しかいないんだ。」

そう、ミソラは、周りの人からは、アイドルとしかみられてない。だが、スバルは違って、普通の女の子としてみていたのだ。

「お前を普通の女として見ているのは、スバルだけだと思っているのか？」

「え！？まだ他にもいるの？」

ミソラはまだ自分のことを普通の女性としてみている人が、いると聞いて驚いた。賢哉はそれに答えた。

「ここから俺の言いたいことだ。そう、俺はお前のことをアイドルとしてなんて見てない。普通の女として、俺は見ている。」

そして、お前のことをゲームで見ているうちに、俺はお前を普通の女として、

好きになったんだ。そう、俺は、お前のことが好きだ！お前にはスバルがいるから付き合えなんて言わないが、ブラザーを結んでくれ！頼む！」

ミソラは、突然の告白に驚いた。同時に自分のことを普通の女性としてみてくれる人が他にいて、嬉しさも込み上げてきた。そして、満面の笑みでミソラは答えた。

「ありがとう！私を普通の女の子としてみてくれて。喜んでブラザー結ばせてもらうよ！」

そして、二人はブラザーを結んだ。ミソラはその場を立ち去ろうとしたが、賢哉に止められた。

「ちょっと、お前とスバルのデート場所を提案しようと思って。」

「へえ。何処なの？」

賢哉は、ハンターを出して、エアディスプレイで画像を見せた。

「ヘリマシティーにあるワピタだ。凄くでかいショッピングモールでな、デートスポットとしても有名なんだ。告白の場所は、屋上が一番だ。」

「分かった。後でスバル君を誘ってみるよ。じゃあね。」

そして、ミソラは去っていった。それを見届けた賢哉も部屋の外へ行き、暁のところへ行った。そこには大吾もいた。

「暁、大吾さん、ミソラとスバルのデート場所が分かったぜ！」

「よう賢哉。それで場所は何処だ？ククククク……」

「ほう。何処だ？」

裏では賢哉とサテラポリス（暁）とWAXA（大吾）が動いていた。

「ヘリマシティーのワピタだ。告白の場所は屋上だ。」

賢哉は、作戦でミソラをワピタへ、誘ったらしい。

「いい事聞いたぜ。で、何をして欲しいんだ？」

暁は面白そうに賢哉の要求を聞いた。

「土日までに店のいたるところに集音マイクつきの監視カメラを仕掛ける。屋上にはズームイン、ズームアウト可能な集音マイク付き監視カメラを何台も仕掛ける。見つからないようにな。」

告白の瞬間は、WAXAの力でテレビで全国に放映しろ。」

賢哉は暁、大吾に要求を言った。暁、大吾は、声をそろえて、

「任せとけ！！」

と言った。その後は部屋中に笑い声が響いた。

F M王の話と賢哉の話（後書き）

賢哉、告白しちゃいましたね。

ケフェウスの技の名前、知っている方がいらしたら、感想にて教えてください。

ミソラからの誘い

スバルと賢哉はWAXAの外で合流した。賢哉は嬉しそうな顔をしている。スバルは、考え込んでいる。

「賢哉君、何かあったの？」

スバルは嬉しそうな賢哉を見て、気になってこう言った。賢哉はちよつと照れながら、

「実は俺、ミソラが好きだったんだ。一人の女として。だからブラザー結んでくれて頼んだら、OKしてくれたってわけ。」

賢哉はミソラとブラザーを結んだことをスバルに伝えた。

「へえ、君もミソラちゃんを普通の女の子として見てくれていたんだ。」

スバルは感心して賢哉に言った。賢哉は考え込んでいるスバルを見て、言った。

「お前、何か考え込んでいるようだが、何かあったのか？」

それを聞いたスバルは、直ぐに答えた。

「実は、エースPGMのことなんだ。調べてみたら、中に小さいサイバーが出来ていたらしいんだ。だから昨日ファイナライズできたんだ。」

「ほう、それはよかったじゃないか。」

賢哉はそう言っているが、スバルはまだ考え込んでいる。

「長い間メテオGの中にいたせいで、ノイズの耐久力が5000%まで上がっていたんだ。」

「いい事ばかりじゃねえか。まだ、悩み事でもあるのか？」

賢哉は気になってスバルに尋ねた。スバルは再び口を開き、

「僕はその時5000%でファイナライズしたら戦いが有利になる
と思っていたんだ。」

「そしてヨイリー博士から何か言われたのか？」

賢哉はヨイリー博士のことを口に出した。スバルはコクンと頷いて、
こう言った。

「ヨイリー博士が、5000%でファイナライズすると何が起ころ
かわからないって言ったんだ。それでがっかりしてただけだよ。気
にしないでいいよ。」

「わあつた」

そして二人はウェープライナーに乗ろうとしたとき、後ろから誰か
がこっちに来了た。

「待って、スバル君！」

そう、ミソラだ。ミソラは、こっちに来て、スバルに言った。

「日曜日、空いてる?。」

そう、デートの話だ。スバルは返事をした。

「まあ、空いているよ。何するの?。」

「此処へ一緒に買い物へ行きたいの。」

そしてミソラはスバルをヘリマシティーのワピタへ誘った。

「うん、いいよ。」

スバルは承諾して、賢哉とスバルはウェーブライナーに乗って家に帰った。因みに今日は水曜日だ。家の中では、茜が料理を作っていた。

「「ただいま」」

「お帰り。二人とも、2階でご飯待ってて。」

二人は2階へ上がっていった。二人はベッドの上で話をしていた。

「賢哉君。」

「何だ?えらく真剣な顔してるなあ。」

スバルは柄にも合わず、恐い顔をした。

「日曜日、僕とミソラちゃんの買い物でまた賢哉君何か企んでいるの？」

スバルは警戒している。賢哉は、自然な顔つきで、

「流石にそんなことはしないぜ。（本当は監視カメラでお前達の感動シーンを全国の皆さんに見てもらうぜ。クククク）」

「そう。ならよかった。でも何か変なことがあったら、また鼻血出させるよ。」

スバルは、笑顔で恐ろしいことを言った。

「あ、そうだ、お前、あそこ大丈夫か？」

賢哉も笑顔で凄いことを言った。そう、スバルは大事なところを、賢哉に蹴られたのだ。その時、賢哉の腹に裏拳が来た。

「ぐえっ！何しやがる。」

「はは、頭に来たからやったただけさ。」

「やる気かてめえ！」

「やるよ」

二人はまた取っ組み合いを始めた。それを見ているウィザード達は、呆れていた。

『スバルのやつ、けんかを楽しんでやがる。俺もちよっと引くぜ。』

『賢哉もねえ。でも見ているほうも楽しいわね。』

そうしている内に茜が2階に上がってきた。

「二人とも、喧嘩止めてご飯にするわよ。」

「はい」

そして茜たちは1階へ降りてご飯にした。

ミソラからの誘い（後書き）

変なところで切ってしまいましたね。
感想待ってます。

スバルの変化

時間は、午後7時。賢哉とスバルは夕食を食べている。メニューは、サバの味噌煮と、生野菜サラダ、豚汁に白ご飯だ。茜が作ったのだから、その味はプロ級だ。

そんな料理を毎日食べている賢哉とスバルは本当に幸せだ。そんな美味しい料理を食べながら、二人は話をしていた。

「なあスバル。」

「何？」

「お前、俺と住み始めてから性格変わってないか？ゲームで見たときは、人を殴るような行動は起こさなかったけど。」

賢哉はスバルに何故性格が変わっているのか聞いた。そして先に口を開いたのは茜だ。

「スバルは兄弟と同じような人がいて、嬉しいのよ。スバルのこんな一面を見るのは、初めてねえ。」

そう。スバルは一人っ子なので、家に楽しくじゃれあえる人間がいなかったのだ。だから賢哉が、この家に来て性格が変わってしまった、と言うことなのだ。茜の言葉を聞いたスバルは、若干照れている。

「確かに茜さんの言うとおりだな。俺も前からスバルのこんな一面を見たかったんだ。」

だがこれ以上スバルがキャラ崩壊を起こしたら、読者少なくなると
思うので、控えめにします。不愉快に思った方はすみません。

二人とも食べ終わり、そして、大吾が帰ってきた。

「ただいま。」

「お帰り。大吾さん。ご飯なら出来てるわよ。」

次は大吾がご飯を食べ始めた。賢哉とスバルはテレビを見ている。

「この世界のテレビは、意味分らないな。暇だから、ウィルスバ
スティングでゼニー稼いでくる。トランスコードXXX！サザンク
ロス・ロックマン！」

賢哉はSCロックマンになってどこかへ行った。賢哉もワピタに行
きたいらしい。日曜日になったら、一人で買い物するつもりだろう。
他に目的があると思うが。

「じゃ、母さん、お風呂入ってくるよ。」

そして、スバルは風呂場に向った。一方賢哉は……

「メテオレーザー！」

数十体ほどの大量のウィルス達をすごい速さで、倒している。それ
で手に入るゼニーは半端じゃないだろう。賢哉曰く日曜の買い物の
目的はバトルカードを買うことらしい。

だがこの数のウィルスを倒しても結構バトルカードが手に入る。因
みに今いるウィルスの種類は、モノソード系とタヌツキー系とメッ

トリオ系とバルカナ系とスマイリー系だ。

「結構疲れるなあ。だがこんなにゼニーが手に入った。日曜日何買おうかなあ。」

賢哉はウィルスを全て倒して、ハンターの中のゼニーを見た。そして帰っていった。

一方スバルは……

「いい湯だな」

のんびりと湯船に浸かっていた。お湯の温度は約42。結構熱いほうだ。因みに作者も毎日この温度で浸かっているらしい。何分か浸かっているといきなりウォーロックが、現れた。

『俺も入らせてくれ』

現れたウォーロックは頭の上にタオルをのせていた。温泉気分を味わいたいのだろう。

「ウォーロック！いきなり現れないでよ！」

『お前と話がしたくてな。』

ウォーロックは、スバルと話をするために此処へ来たらしい。

「話って何？」

スバルは話の内容をウォーロックに尋ねた。それに対しウォーロッ

クは答えた。

『オフクロの言ったとおり、お前、性格変わったな。前よりほんのちよっと荒っぽくなった。』

ウォーロックはスバルの性格が変わったことを話題にした。それに対しスバルはビックリ発言をした。

「確かに俺の性格変わったなあ」

何とスバルは自分のことを「俺」と呼んでいた。ウォーロックもビックリ仰天。

『おい、スバル！お前、今「俺」って言わなかったか！？』

「あ、間違えた。ごめん！賢哉君の影響かなあ。僕の性格変わったやつたのは。」

だがウォーロックは腑に落ちない。そして、こう言った。

『賢哉がいないときは俺がいたのに、何故俺の影響を受けなかったんだ？』

確かにウォーロックの言うことは正しい。だがスバルはこう答えた。

「ウォーロックは僕に嫌がらせしたこと無いでしょう？ただ賢哉君は、現実には僕の醜態を学校の皆に見せびらかすという嫌がらせをした。そこが君と賢哉君の違いだね。」

そう、誰でもそんなことをされれば、怒ってしまう。スバルはそこ

から性格が変わってしまったらしい。それでも腑に落ちない方、すみません。

「そろそろ上がるのか。変わってしまった性格は仕方ない。そのままにしておくよ。」

スバルはこの性格をそのままにすると行って、ウォーロックをウィザードオフにして風呂から上がった。
着替え終わり部屋に行ったら賢哉がいた。

「賢哉君、お風呂空いたよ。入って。」

「分かった。じゃ、入ってくるか。」

賢哉は、風呂へ直行した。スバルは、明日の準備をして、眠りに着いた。後から上がってきた賢哉も歯を磨いて直ぐに寝た。

スバルの変化（後書き）

腑に落ちない点があつたら、すみません。
感想待ってます。

スバルと賢哉の1日

時は飛んで、土曜日。ベッドの中ではスバルが寝ていた。時刻は午前9時。賢哉はもうとつくに起きてる。1時間前にウォーロックが起こしに来たが失敗した。

そして今度は、賢哉が起こしに来た。

「スバル！起きろ！何時だと思っている！？」

「後24時間……」

スバルはくだらないギャグを言った。賢哉は、遂にキレてしまった。

「詰まんないギャグ言ってんじゃねえ！こうなったら実力行使！おりゃあ！」

賢哉は寝ているスバルに思いっきりパンチした。その瞬間、悲鳴とともにスバルが飛び起きた。

「何するんだよ！賢哉君！わき腹が〜！」

どうやらスバルは横を向いて寝てたため、パンチがヒットしたのは、わき腹だった。

「お前が起きないからだ。自業自得だぞ。休日だからって、こんな時間まで寝ているとは、けしからん！」

「だからってそんなことしてまで起こすこと無いだろう！」

「分かりました。今行きます！賢哉君、WAXAへ行くよ。」

暁の様子からして大変慌てていた。二人は、急いでWAXAへ行った。

ウェーブライナーに乗って、WAXAに着いて、二人は中に入った。そして暁のいる、メインコンピュータールームに行った。

「暁さん、どうしたんですか？」

「暁、何かあったのか？」

二人はほぼ同時に暁に尋ねた。つして、暁は答えた。

「敵について、分かった事がある。」

どうやらWAXAが敵の情報を掴んだそうだ。続いて暁が言った。

「敵は人間みtainな電波体だっただろう？」

「はい、そうです。」

暁は人間みtainな電波体の事について知っているようだ。

「現場から残留電波を採集して、調べてみたんだ。するとすごい、発見をした。」

「どんな発見なんだ？」

あの間、WAXAは残留電波を調べていたそうだ。それですごい発見をしたらしい。

「なんとあの電波体、」

暁は少し間をおいて、衝撃的なことを言った。

「人間の遺伝子をデータ化した人格プログラムを持っている。」

なんと、人間の遺伝子を使って作られていたのだ。それを聞いて、スバルと賢哉は非常に驚いている。

「なんでそんな事を……」

「以上だ。帰ってもいいぞ。」

「分かりました。」

そして、二人は帰っていった。外に出た瞬間、賢哉は急に倒れた。

「賢哉君！しっかりして！」

「一面真っ白……ここは、俺の意識の中……」

そう、賢哉は意識の中にいた。するとどこからか、声が聞こえてくる。

『久しぶりです』

「お前は夢に出てきた人……」

この世界に行く前の夢の声がした。謎の声は、こう言った。

『よくサザンクロスを見つけました。これで貴方は大きな戦力になりました。』

「だから何だよ」

賢哉は乱暴に聞き返した。

『ある条件を満たしたら、貴方達に新しい力を与えます。』

「ある条件って、何だよ？」

謎の声は、新しい力を与えると言った。賢哉は条件の内容を聞いた。そして、謎の声は答えた。

『人間とウィザードとの絆を証明するのです。では、さようなら。』

そして賢哉の意識が薄れていき、目を覚ました。そこは病院のベッドの上だった。隣には茜とスバルがいた。

「茜さん！俺、いつまで寝てた？」

「大体2時間くらいね。心配したのよ。」

どうやら賢哉は2時間くらい寝てたそうだ。時刻は正午。お昼の間だ。

「じゃ、帰るわよ。」

「賢哉君、立てる？」

「ああ、大丈夫だ。」

3人は病院を出て、家に帰り昼食を食べた。食べ終わり、二人は部屋に戻った。そして、賢哉は夢であったことをスバルに話した。

「人間とウィザードとの絆かあ。ゆっくり考えようか。」

「そうだな」

その時、玄関から、呼び鈴が鳴った。

ピンポン

「誰だろう。」

スバルと賢哉は、玄関に行つて、ドアを開けた。外には、ルナとゴン太とキザマロがいた。最初に口を開いたのは、賢哉だった。

「よう、御三方、何か用か？」

「スバル君、あの写真について、ゆっくりと話を聞かせてもらつね。」

そう、ルナは、あの写真について話がしたくて、此処に来たのだ。

「委員長、まだ根に持ってたの？」

「理由をしっかりと聞くまで、帰りません!!」

そして、ルナたちは、勝手に上がっていった、二人も追うように中へ入った。ルナたちはスバルの部屋で、話を聞いた。

「まず一つ。何でミソラちゃんは、貴方の家に泊まりに来たの？」

「それは、夜遅いから、と、本人が言ったからです。」

1つ目の質問にスバルは答えた。それを賢哉は、笑いをこらえながら、見ていた。そして、ルナが二つ目の質問をした。

「二つ目。何でミソラちゃんは貴方のベッドで一緒に寝てるの？」

「それは他に寝るところないし、本人が泣いて希望したからです。それと賢哉君が無理やり。」

スバルは、賢哉に責任転嫁した。だが、賢哉は何故か平然としていた。そして、ルナは最後の質問をした。

「最後。何故、貴方はミソラちゃんに抱きついてるの？」

「それは寝ている途中で理性が切れてしまつて。」

スバルは最後の質問に答えた。賢哉は、平然としている。そして、ルナが結論を出した。

「まず、一つ目の質問の答えについて。まあ、女の子が一人歩きしたら、危ないからね、それは、まあいいわ。」

一つ目の結論を聞いて、スバルは少し安心した。そして、ルナは二

つ目の結論を出した。

「二つ目の質問の答えについて。本人が希望したのなら、仕方ない。許すわ。」

この結論もギリギリセーフだ。だが3つ目の結論で、

「三つ目の質問の答えについて。許せないわ！いくら理性が切れたとはいえ、酷すぎるわ。この写真をマスコミに知らされたくなければ、今此処で土下座して懺悔しなさい！」

この結論は重過ぎる。スバルは、プライドを捨てて、みんなの前で土下座した。

「皆さん、本当にすみません！どうか許してください！」

それを見た賢哉は、遂に許せなくなって、

「ルナ！酷すぎるだろ！！？そこまでして、スバルを虐めたいのか！！？言つとくが、スバルとミソラは強い絆で結ばれた、ブラザーなんだぞ！！？」

賢哉の言葉にルナもキレた。

「それがどうしたのよ！！？スバル君とミソラちゃんは、ただの友達なのよ？大袈裟に言わないでよ！」

ルナのその言葉に、賢哉は、こう言った。

「スバルとミソラは何故強い絆で結ばれているのか、ゲームで知っ

た俺が教えてやる。聞け。」

賢哉はスバルとミソラの過去や、何でこんなに強い絆で結ばれているかをルナたちに教えた。

「確かにあの時のスバル君とミソラちゃんは、同じ境遇にあったわね。納得したわ。」

「感動だぜ！スバルは男だぜ。」

「スバル君とミソラちゃんにはそんな過去が……知りませんでした。スバル君すみません。」

そして、何とか、許してもらった。その後、スバルは言った。

「有り難う。僕には言えなかった事を言ってくれて。」

「何を言う。俺はただツンデレのルナがムカつくだけだ。アイツのキヤラは、生意気なんだよ。だから、一喝入れてやっただけだ。」

賢哉は大のルナ嫌いである。だからルナに物言い出来たのだ。

「（ツンデレってなんだろう？まあいいや）あ、そうだ。ブラザー結ばない？」

「いいぜ」

そして、二人はブラザーを結んだ。

時刻は7時、そして、茜が二人を呼んだ。

「二人ともご飯よ。」

「はい」

そして、二人は帰ってきた大吾と一緒に家族で夕食を食べて、風呂に入ってから寝る準備を済ませて寝た。

明日はミソラとのブラザー関係中の最後のデートだ。それを知らないスバルはただの買い物だと思って早めに寝た。

スバルと賢哉の1日（後書き）

謎の声は人間じゃありませんね。
多分、違う世界のもです。
感想待ってます。

買い物

日曜日、時間は午後6時。スバルと賢哉はもう起きて朝食を食べていた。

「スバル、今日は、ミソラとデ……じゃなくて買い物行くんだろう？」

「まあね。」

賢哉はデートと言ってしまいそうになったが、買い物と言った。それにスバルは答えた。

「（この買い物か二人のブラザー関係中最後の買い物になる。感動シーンを全国の皆様に見せてやるぜ）なら早く食べる。」

「はいはい。」

そして、二人は食べ終わり、歯を磨いた。そして、丁度いいタイミングで、ミソラが来た。

「スバル君、早く行くよ。」

「分かったよ。じゃ、行こうか。」

そして、ミソラとスバルはブラザー関係中最後のデート先、ワピタに向った。十数分後、賢哉も気づかれないように、ワピタへ、バトルカードを買いに行った。

そして、先にミソラとスバルがワピタに着いた。ものすごい大きさ

だ。建物の色は黄色で、外にもいろいろある。その中へ二人は入って行った。

そして、気づかれないように、賢哉も入った。

スバル、ミソラ視点

二人はまず、服屋に向った。当然スバルはファッションの知識が無いので、ミソラに引き摺りまわされていた。

「ねえスバル君、この二つ選んだんだけど、どっちにする？」

ミソラは、水色のパーカーとピンク色のワンピースを選んだ。

「ミソラちゃんは、どれを着ても似合うよ。」

「ほんと？じゃあ、どっちも買おう。」

そして、二人は、レジに行って会計を済ませた。

賢哉視点

賢哉は、バトルカードショップに行った。

「いっぱいあるなあ。店長さん、1番お薦めなのは何？」

賢哉は、店長にどれが一番強いのか聞いた。

「これいいんじゃない？クロスデイバイドだ。お店で、一番高いカードだね。なんたって、あの、200年前の英雄とともに戦った、軍人のナビのカードだからね。」

すると、賢哉はトレーニングでスバルと戦うときにサザンクロスか

ら聞いた言葉を思い出した。

『名前に「クロス」ってつくバトルカードの威力が倍になるの。』

その瞬間、賢哉の目が光った。

「店長さん、幾らなの？」

「ギガクラスだから高いよ。値段は60000ゼニーだ。」

「（高い……俺がウィルスバスターで貯めた金を全て使ってしまう。でも、すごい威力になるぞ。よし……）そのバトルカード、買った！」

賢哉はバトルカードを1枚買って屋上に行った。

その頃WAXAでは、二人の男が、モニターを見ていた。

「ククク。スバルとミソラめ、俺達が見てるかも知らずに。大吾さん、テレビ中継の準備出来てますか？告白シーンを全国の皆さんに見てもらうためのね。」

「いつでもOKだ。暁君。ハハハハハ！」

サテラポリス（暁）と、WAXA（大吾）の計画は動き出していた。

スバルとミソラ視点

「ねえ、スバル君、次は、あそこへ行こう？」

ミソラが指差したところは、ゲームセンターだ。

「いいよ」

スバルは承諾して二人はゲームセンターに行った。ゲームセンターでは人がにぎわっていた。カードゲームで遊ぶ子供、コインゲームに夢中になる大人、いっぱいの人とゲームがあった。

その中で、二人が最初に選んだゲームは、結構メジャーなレーシングゲームだ。それは決して「マ・オ・ート」じゃない。

「よし、負けないよ!」

「僕も頑張るぞ。」

そして、二人で対戦した。ミソラは、初心者にもかかわらず、慣れた手つきで操作している。

スバルも負けてはいなく、慣れた手つきで操作していた。数分たつて、結果がでた。

「やった。私の勝ち!」

「負けた。惜しかったなあ。あのカーブを失敗しなければ勝てたのに……」

「負け惜しみ言わない!」

ミソラの勝ちだ。続いて、次のゲームを探し始めた。次はスバルが提案した。

「あれはどうかな?」

スバルが指差した場所は、モグラ叩きならぬメットリオ叩きだ。

「それにしよう。」

二人はメットリオ叩きの場所に行った。

「それじゃあ僕から。」

そして、スバルはお金を入れて、やり始めた。メットリオは、ウジヤウジヤ出てくる。それをスバルはすばやく叩いていった。
終わった後出た得点は、

「60点。こんなものかな。」

「スバル君凄い！次、私！」

ミソラもお金を入れてゲームを始めた。だがあまり叩けなかった。
出た得点は、

「30点。負けたあ。じゃ、そろそろお昼食へに行かない？」

「いいよ。ただし、割り勘で。」

「しょうがないなあ。」

そして、二人は昼食を食べに、レストランへ向った。そこは最近話題のラーメン屋、「ラーメン処アンポンタン」だ。此処のラーメンは、複雑だけど止められない味で有名である。

二人は、席に座って、メニューを見た。

「店長自慢の一品、アンポンタンメンだって。じゃ、これ、二つにしよう？スバル君。」

「いいよ。」

そして、二人は店員を呼んで注文をした。20分経ってアンポンタンメンが、二つ来た。見た目は、ものすごく気味が悪い。麺は太めでスープの色はなんと緑。ねぎが入っていて、チャーシューは厚切り4枚、メンマも忘れずに、そして、一番驚くのが何故かチョコレートが乗せてあることである。しかもデカ盛り。まさにゲテモノ。スバルとミソラはそれを食べ始めた。

「あれ？複雑な味だけど、止められない味だ。凄いな。」

「ほんとだ。美味しいような美味しくないような味だけど、止められない！」

そして、二人は、一気に食べ終えた。あのラーメンにはどんな調味料を入れてあるのだろうか？でも何故か止められないのである。不思議なラーメンだった。

二人は会計を済ませ、どこへ行こうか決めていた。

「じゃ、本屋へ行こう？」

「ええ〜。」

「いいじゃんいいじゃん。」

そして、ミソラは渋々スバルと一緒に本屋へ行った。もちろん、スバルは宇宙の本に夢中になって、ミソラは、完全に置いてけぼり状態だ。

スバルが本を選び終わるには、30分かかったそう。そして、二人は会計を済ませて、ベンチに座っていた。

「スバル君、楽しかったね。」

「そうだね。そろそろ帰ろうか?」

スバルがミソラに帰るかどうかが聞いたが、ミソラは、こう答えた。

「ちょっと待って、帰る前に屋上で話があるの。」

「分かったよ。じゃ、行こうか。」

そして、ミソラとスバルは屋上へ行った。それを待ってましたかのように、賢哉は物陰に隠れた。

その頃WAXAでは、

「二人が屋上へ行ったぜ。大吾さん、準備はいいですか?」

「OKだ。ではテレビ中継、始め!」

大吾と暁は、遂に計画を実行した。

屋上では、スバルとミソラが向き合って立っていた。

「話って何?」

遠くのウェーブロードでは、一人の電波体がいた。

『この二人何かするつもりだ。邪魔しないでやろう。俺は心が広いやつだからな。』

人間の姿をした電波体は、気配を消しながら、見守っていた。

「スバル君とブラザーになるときにスバル君が言ってくれた言葉、覚えている？」

「うん、覚えているよ。」

先ずはブラザーを結ぶときに言ったスバルのセリフ、「僕には君の気持ちが分かる。だから君の助けになればいいと思っている。」この事について話した。

「あの時は凄く嬉しかったんだ。感謝の気持ちでいっぱいだったの。」

「僕もブラザー結んでくれたときは凄く嬉しかったよ。」

ミソラはそれについて感謝の意を述べた。

「その後からは、スバル君に会う度に変な感情が湧き出てくるの。最初は気のせいだと思ったけど、この前賢哉君とハープに言われて気づいたの。」

それからその気持ちを抑えきれなくなっていんだ。今の私にとって、スバル君はもう友達じゃないの。」

「ブラザー切るつもりなの？冗談はよしてよ。」

スバルはブラザー切るのと勘違いしている。勇気を振り絞っているミソラの気持ちもわからずに。

「違うよ。今の私にとって、友達以上に、ブラザー以上に大きな存在なの。今から、スバル君に前から言いたかった言葉を言うよ。」

「（いつものミソラちゃんと違う……まるで何かを決心したような瞳だ……覚悟しないと……）」

そして、ミソラは作者にとっては非常に書き難い恥ずかしいセリフ。スバルにとって、賢哉が言った事に気づくような一言を放った。

「私はブラザーを結んだときから、スバル君の事が好きでした！もしよければ付き合ってください！」

その言葉は作者に悲鳴を上げさせるような言葉だった。その言葉を聞いたスバルは、なんと大胆なことにミソラに抱きついて、こう言った。

「（賢哉君が言ってた事に気づいたよ。ミソラちゃんは、僕のことが好きだったんだ……）僕のためにこんなに勇気を振り絞ってくれて有り難う。僕もミソラちゃんが好きだったんだ。」

でも、この言葉は、言うのが恐くて心の中にしまっていたんだ。本当に有り難う。これからはブラザーじゃなくて、恋人同士。だから、これからもよろしく。」

そして、二人は静かに抱き合った。

その頃WAXAでは……

「クククク！計画成功！これで全国に……クハーツハツハツハ！」

「暁君、此処までの道のりは長かったぞ。テレビ中継オフ！」

計画は成功した。

その時、物陰から、賢哉が出てきた。

「見せてもらったぜ。中々ロマンティックだったぜ。」

その瞬間ミソラとスバルは顔を分かりやすく真っ赤に染めた。

「見られちゃったね。」

「そうだね」

「おめでとう！これで二人は晴れて恋人同士だ。（計画成功！）」

賢哉が言った瞬間、遠くから電波体が現れた。まさにグッドタイミング。

『見せてもらったぜ。わざわざ空気呼んでやってきたんだ。感謝しろよ。ここで自己紹介。俺はゾランド。あの方の命でお前達を抹殺しに来た。電波変換！』

ゾランドが、電波変換した。その姿は赤色を基調としたボディに、体に、複数のラインがある。そして、手足に黒のアーマーを装備している。

『この姿が、ゾランド・エスタリア。お前らも構えろ。』

「いいタイミングで敵だ。電波変換しろ。」

賢哉が言って3人は電波変換した。

「トランスコード!」

「XXX!サザンクロス・ロックマン!」

「003!シューティングスター・ロックマン!」

「004!ハープ・ノート!」

『それじゃあ始めるぞ。』

人間の姿をした電波体の合図とともに、

『「ウェーバトル、ライド・オン!」』

いいタイミングで戦いが始まった。

買い物（後書き）

やっちゃいました。はは、やっぱりこつこつ運命なんですね。
感想待ってます。

炎の使い手　ゾランド・エスタリア

『「「「ウェーブバトル、ライド・オン！」「」』

そして、バトルが始まった。

「お前らの目的は何だ？しかもお前らは人間の遺伝子をデータ化して、人格プログラムに組み込んだそうだな。何故そんな事をする必要がある？」

まずはSCロックマンが尋ねた。ゾランド・エスタリアは、少し考え込んで、答えた。

『何故人間の遺伝子を人格プログラムに組み込んだかだけ答えてやる。それは人間の遺伝子を使ったほうが負のエネルギーが大きくなる。そして、忠実に再現できるからだ。俺が教えてやれるのはここまでだ。おしゃべりは止めて、此方から行かせてもらう。マシガンファイアー！』

ゾランドは、理由を答えると、手を砲口に変化させ、火の玉を連射した。火の玉の目標は3人だ。3人は軽々避けたが、

『下手な鉄砲数うちや当る。連射し続けるまでだ。』

ゾランド・エスタリアは次はもう一つの手を砲口に変化させ、連射した。火の玉はいくらでも撃てるらしく、その攻撃はとまらない。SSロックマンたちはただただ避けるばかりだ。

「中々攻撃できないよ……」

「くっ！打開策は無いのか？」

「疲れてきたわ。何とかならないの？」

3人は口々につぶやいていた。そして、遂にハープノートが、攻撃に当たってしまった。

「キヤーーッ！」

だが、幸いダメージは少なく、直ぐに体勢を立て直せた。

『この言葉、本当だったな。まだまだ連射続けるぜ。』

「させるか！バトルカード、クロスデイバイド！」

SCロックマンは暗転カードのクロスデイバイドを使った。すると時間が止まり、SCロックマンの目の前に、黒いナビが現れ、ゾランド・エスタリアをX字に切り裂いた。そして、時間が動き出した。

『グアーーーーーッ！暗転カードは卑怯だぞ！！！？』

ゾランドは悲鳴をあげて、暗転カードを使ったことに文句を言っていた。だが、賢哉も言い返した。

「何が卑怯だ！暗転カードは対戦の基本だぞ！そこらへんのメガクルスカードは、皆暗転カードだぞ！」

SCロックマンは妥当な言い訳をした。ゾランド・エスタリアは、

半分くらいのダメージを負っている。

『そろそろ他の技を出すかな。ファイアーウィンド!』

ゾランド・エスタリアは、手を扇風機に変化させて炎の風を放った。だがSSロックマンも諦めてはいない。

「バトルカード! ウィンディアタック!」

ウィンディアタックの風でファイアーウィンドを相殺した。

『チクショウ! まだまだ! レンゴクノツルギ!』

ゾランドは炎を纏った剣で、切りかかった。攻撃はSSロックマンにヒットしようとしたが、

「ブラッディレッドソード!」

SSロックマンの目の前にSCロックマンが現れ、ブラッディレッドソードで受け止めた。

「ボーっとしてるんじゃないねえ! ファイナライズしろ!」

「分かった。ロック、ノイズ率は?」

『ギリギリ行けるぜ。』

ウォーロックがノイズ率を言って表示した。丁度200%だ。そして、SSロックマンは、ファイナライズした。

「ファイナライズ！ブラックエース！」

ノイズに包まれ、姿を現したのは、漆黒の戦士、ブラックエースだった。

「バトルカード！スカルアロー！」

スカルアローがゾランド・エスタリアにヒットした。賢哉が押し切られる直前のタイミングで。カウンターヒットだ。

『動けん……』

「おいスバル！ヒソヒソヒソ……」

「分かったよ。」

すると、SSロックマンは手にブラックホールを作り、ゾランドに投げた。ゾランドはブラックホールに包まれ動けなくなった。そして、SCロックマンはブラックホールに、ジェネレーターと一緒にレーザーを放った。そして、ブラックホールの色が赤に変わった。今度はSSロックマンがノイズソードでブラックホールを掛け声と共に切った。

「合体技！レッドエンドギャラクシー！」

そして、普通のブラックエンドギャラクシーよりも勢いよくブラックホールが爆発した。爆発が収まるとゾランドが跡形も無く消えていた。

「やったぜ！」

『いや、遠くにアイツの周波数を感じる。逃げられたみたいだ。』

ゾランドは当たった直後に周波数変換して逃げたみたいだ。スバル達は電波変換を解除した。

「それにしても賢哉君が使ったバトルカードって何なの？」

スバルが賢哉にクロスデИБライドの事を聞いた。

「バトルカードショップで買ったやつだ。60000ゼニーもしたんだ。」

「そんなに……」

するとスバルのハンターに電話がかかってきた。スバルは通話ボタンを押してエアディスプレイを出した。

「曉さんか。何の用ですか？」

曉が電話をかけたみたいだ。スバルは、曉に用件を聞いた。

『スバル、実は、この前、賢哉に言われて店中に監視カメラを仕掛けたんだ。屋上にも高性能なカメラを。だからお前とミソラのラブシーンが丸見えだったんだよ。せつかくだから』

大吾さんの協力でテレビ中継をしてもらったんだ。多分全国中に知られてると思うぞ。じゃな。』

そして、曉は電話を切った。するとスバルは、賢哉のほうを向いた。その顔は笑顔だが内心凄く怒っている。

「賢哉君。」

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひい！」

珍しく賢哉は恐がっている。

「僕は宇宙の先に何かがあるのか知りたいんだ。だから、代わりに君が行って来て。ここからダイブすればすぐに行けるよ。」

スバルは遠まわしに賢哉に死ねと言った。

「ごめんなさい！」

そして、賢哉は逃げていった。

「スバル君性格変わった……」

「さ、帰ろう、ミソラちゃん。」

そして、二人も帰っていった。

炎の使い手 ソランド・エスタリア（後書き）

戦闘シーンがスバル達が一方的な件について。すみません。
感想待ってます。

またまた喧嘩

時間は午後4時。スバルとミソラは、ワピタを出て帰ろうとしていたが、ミソラが立ち止まり、口を開いた。

「あ、そうだ。スバル君、せっかくだからあそこでゆっくり話さない？」

ミソラが指差したのは、公園だ。ベンチで話をしたいのだろう。

「いいよ。」

そして、二人は公園に行った。そこには誰もいない。二人きりで話するには絶好の場所だ。そのベンチに二人は座った。少しの間沈黙が続く。そして、最初に沈黙を破ったのはミソラだった。

「スバル君、本当にありがとう。私のことを好きって言うてくれて、さっきの言葉を聞いたとき私は嬉しくて嬉しくてしょうがなかったの。自分が好きな人からそう言うてくれて。私も、さっきの言葉言うときは、関係が切れたらどうしようって不安だったの。だけど、言わないと、おかしくなりそうで仕方が無かった。そして、さっき、思い切って言ったの。そしたらスバル君はちゃんとOKしてくれた。本当に嬉しかったの。」

ミソラは自分の心境を語った。ずっと前から言いたかった事を言えて、そして、OKしてもらって嬉しかったのだ。

「僕のほうこそ有り難う。前から好きだった人からこんな言葉を聞いて、本当に嬉しかった。君は本当によく頑張ったよ。僕のために

勇気を出して言ってくれた。だから断るわけにはいかない。そう思ったから、そして何よりも君が好きだったから、OKしたんだ。だから、これからずっと君の傍にいるよ。安心して。」

スバルも自分の心境を語った。どうやらこの二人、完全なる両思いだ。大抵は友達から恋人になるという事はあまり無いのである。ミソラの告白が成功したのは、お互いがお互いの事が好きだったからである。そして、この二人は、関係を壊さずに逆にもっといい関係を築いたのである。他人から見たら、この二人が付き合うイコールスバルは日本中の人間を敵に回すことになる。そうになると、ミソラまで巻き込んでしまう。二人はそれを覚悟して恋人同士になったのだ。そう。二ホンを敵に回しても二人の絆をもっと強くするために。

「ありがとう。スバル君。これからもずっと一緒だからね。」

「絶対に君を守ってみせる。」

二人は抱き合ってキスした。この展開は非常に甘すぎる。その甘い展開を壊すように、カメラのシャッター音が鳴った。

カシャッ

その音に気づいたミソラとスバルは音のしたほうを向いた。しかし誰もいない。今度はスバルはビジュライザーを掛けて見た。するとそこには、SCロックマンがいた。

「よお、お前ら。アツアツだな。と言うわけで、今撮った写真をマスコミデンプ君に見せてくるか。」

どうやらSCロックマンはマスコミデンプ君からカメラを借りてい

ただ。それで今、スクープ写真を撮ったのである。その瞬間スバルの怒りが発動した。

「させるかよ……その写真を消してやる……お前ごとな。トランスコード003！シューティングスターロックマン！」

スバルは電波変換してSSロックマンになった。

『スバル、こええ……』

ウォーロックまでもがスバルに恐れをなしている。

「お前を消してから、この写真を消す！俺の力、思い知れ！」

「わりいが、戦うつもりは一切無い。レッドレーザー！」

スバルの怒りは限界を超えている。だがSCロックマンは戦うつもりが一切無く、地面にレッドレーザーを放って、煙を起こし、周波数変換で逃げた。

「チッ！逃げられたか。後でぶっ飛ばしてやる！もうこんな時間。ミソラちゃん、帰るよ。」

「（かつこいい……惚れちゃった。）そうだね。そろそろ帰るつか。」

まるで二重人格だ。こんな事を書いている作者って一体……そして二人はウェーブライナー乗り場に行った。手を繋ぎながら。

一方SCロックマンは……

「飛び切りのスクープ写真持ってきたぜ。」

「ビビッ！アリガトウゴザイマス。チヨットミセテモライマス……オオッ！コレイイジャナイデスカ！コレヲニンゲンノマスコミサンニトドケマスネ。ホイ、ソウシンカンリヨウ。」[㊦]

マスコミデンパ君に写真を見せていた。これを見たマスコミデンパ君は、喜んで、人間のマスコミにも届けた。そしてＳＣロックマンは電波変換を解いて、家に帰った。

二ホン某所

「ボス！このゾランド、ただいま帰ってまいりました。」

ゾランドはアジトに帰っていた。そしてボスと呼ばれる人間が口を開いた。

「何故帰ってきた？死ぬば、負のエネルギーが溜まっていくのに。仕方ない。今は休んでおけ。ただし、次行くときは絶対に死ぬ。生きて帰ってくるな。」

ボスは、自分の部下に対してあまりにも酷いことを言った。

「まことに申し訳ありません。では、これで失礼します。」

ゾランドは何処かへ去っていった。

「負のエネルギーと、オーパーツがあればこの世界を破壊できる。醜い歴史が終わる……ハーンハッハッハッハ！」

ボスの笑い声は、部屋中に響いた。

一方星河家では……

「よくもマスコミに送りやがったな！！？この手でぶっ飛ばす！！
でやああああ！」

「だって俺、ストーカーだもん。ぶっ飛ばされるのはそっちの方だ。
おりゃあああ！」

また取っ組み合いを始めていた。

またまた喧嘩（後書き）

変なところで切ってしまいました。
感想待ってます。

チクショウ！（作者にとって）

二人はまた取っ組み合いを始めた。

「賢哉君がマスコミにみせたせいで明日、新聞で1面飾っちゃうんだよ！明日外を歩けないよ！」

「うるせえ！そんなの知った事か！」

そうしているうちに、茜が仲裁に入って何とか収まった。そして二人は仲直りして、1階へ降りた。リビングには、大吾が帰ってきていて、テレビを見ていた。

「おう、スバル、監視カメラのモニターから見せて貰ったぞ！おめでとう！いやゝ、羨ましいな！」

大吾はスバルに祝福の言葉を送った。だがスバルは、意外な答えを出した。

「ありがとう。これも母さんと父さんのお陰だよ。」

「（スバルにしては意外だな。どうしたんだ？）そうか。まあ、これからミソラを守れよ。」

そして、家族一緒に夕飯にした。因みにスバルのあの性格が出てくる事はもうない。理由はギャップがあり過ぎるからである。白ご飯を食べながら先ず口を開いたのは、賢哉だ。

「大吾さん、さっきのスバルものすごく恐かったんだけど。ぶっ飛

ばすとか、ぶつ殺すとか言ってくるんだよ。」

「おい、スバル、変わりすぎだぞ。」

『俺もそう思う。お前恐すぎるぞ。』

賢哉とウォーロックは大吾にスバルが恐ろしい言葉を言ったことを報告した。

「知らないよ。頭にきて、言ってしまったんだ。賢哉君のせいだよ。なんでストーカーを任せたのさ？」

「いいじゃないか。賢哉は、才能あるんだから。」

大吾はいい加減な答えを出した。スバルは遂に吹っ切れた。

「分かったよ。マスコミ達に全てをさらけ出してやるよ。」

そうこうしているうちに皆食べ終わり、スバルと賢哉は、リビングでテレビを見始めた。

「おい、スバル。さっきワピタの外で自分のことを「俺」って言わなかったか？」

賢哉もスバルが、「俺」と言った事に気づいていた。

「確かにそうだね。この年頃だから、男っぽくなったのかなあ。」

「いつそのまま、「俺」って呼んだら？」

「考えておくよ。」

賢哉の問いに対して、スバルは考えておくとやった。なぜならそれは作者の都合だからだ。本当はスバルを男っぽくしたいのだが、したら読者が少なくなってしまうかもしれないからだ。

だから、感想で、スバルをこれから「俺」と呼ばせるか、そのままだけの方がいいか皆さんの考えが出るまで、結論は出さない、ということなのだ。

「とりあえず、風呂入ろうぜ。」

「そうだね。誰から入る？」

賢哉はスバルに風呂に入るように言った。それに対しスバルは、誰から先に入るか、聞いた。

「一緒に入ろうか？嘘だ。だから問答無用で俺から先な。」

そして、賢哉は風呂へ行った。10分位して賢哉が上がってきた。

「空いたぞ。次お前。」

「よし、入ろう。」

スバルも風呂へ行った。また10分してスバルが上がってきた。そして、二人は歯を磨いて部屋に行った。

「スバル、明日どうするんだ？外にはマスコミがウジャウジャ出てくると思うぞ。」

「知った事か。僕は全てをマスコミに知らせるよ。」

スバルはマスコミ共に全てさらけ出す覚悟を述べた。

「スバル、俺の仕事はお前とミソラを盗撮するだけではない事を覚えてくれ。ウィザードオン！サザンクロス、寝るぞ。」

『待つてました！早く寝よう。賢哉。スバル君、賢哉にもちゃんと良い所はあるからね。安心して。それじゃ、お休み！』

「何の事だ？まあいいや。寝よう。」

そして、二人は寝た。

一方ミソラは、仕事で夜遅くに帰っていた。

「ふっ、急に仕事が入って遅くなった。」

そして、家のドアを開けたその瞬間、恐ろしい光景が目に入った。

「な、何これ？」

『なんてありさまなの……？』

なんと家中が散乱している。筆筭（たんす）からは中のものが全て出ている、クローゼットまで中がグチャグチャになっている。そして、金目のものは全て盗まれていて、あるものは散らかった部屋だけ。

「いや……いや……イヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「！」

『落ち着いて、ミソラ。サテラポリスに連絡するわよ。』

ミソラは悲鳴をあげた。その後ハーブに言われた通り、ハンターを操作して暁に連絡した。

『なんだ？ミソラか。どうしたんだ？怯えた顔して。』

「暁さん！家に泥棒が入ったんです！全部の部屋が散乱していて…とにかく来てください！大変なんです！」

『落ち着け、今他のサテラポリスを連れてそちらに向かう。安心しろ。』

そう言っただけで電話を切った。数十分後サテラポリスが来た。そしてミソラはオクダマスタジオに行って楽屋で寝た。

翌朝、スバルは珍しく賢哉と同じ時間に起きた。

「お早う賢哉君。」

「お早う、スバル。」

賢哉とスバルは、着替えて1階へ降りた。1階では茜が料理を作っていた。大吾は新聞を読んでいた。今日はどの新聞でも、「アイドル、響ミソラ、熱愛発覚」とか「響ミソラ、キス」とか書かれているだろう。

「スバル、新聞にお前がミソラとキスしている写真が載ってるぞ。」

羨ましいぞ！この！」

大吾がスバルに軽く肘打ちした。スバルは苦笑いを浮かべている。

「スバル、賢哉、大吾さん、ご飯が出来たわよ。」

「……はい……」

そして、朝ごはんを家族全員で食べて、賢哉とスバルは、学校の準備をした。そして、タイミングよく呼び鈴が鳴った。委員長達だ。スバルと賢哉は玄関で靴に履き替えて、ドアを開けた。そこには呆れ顔の委員長達がいた。

「お早う。テレビで見たわよ。ミソラちゃんはこんなにも貴方の事を思っていたみたいね。仕方ないわ。貴方とミソラちゃんの間係を認めるわよ。」

「ありがとう。委員長。」

委員長は以外にもスバルとミソラの間係を認めた。

「でも、ちゃんと守ってあげなさいよ。ミソラちゃんに何かあったら承知しないからね！」

「分かったよ」

「後、そこらへんにウジャウジャいるわよ？」

スバルは辺りを見回してみると、茂みに3人、物陰に12人、合わせて15人がいた。

「出てきていいんですよ。」

スバルが言った瞬間、一気に出てきた。

「おい、スバル、お前は逃げる。俺が気を引いておく。これも俺の仕事だ。」

「ありがとう。後は、賢哉君に任せるよ。」

そうこうしているうちにマスコミ共がこちらについた。

「トランスコードXXX！サザンクロス・ロックマン！」

賢哉は電波変換した。マスコミたちは、一瞬怯んだ。そのうちにスバル達は逃げた。

「おい、てめえら！この俺が、あのシューティングスター・ロックマンと互角に戦った赤き戦士、サザンクロス・ロックマンだ！取材しやがれ！」

賢哉の言葉を聞いたマスコミたちは、

「何？それは本当か？本当だったら大スクープだぞ！」

「次のスクープだ！」

等と言って、一気に詰め掛けた。その後SCロックマンを質問攻めにした。明日の1面を飾るのは、この事になるだろう。だが、それはSCロックマン自身が望んでいる事なので。どうと言う事ない。

そしてスバル達は学校に着いた。入ったら、玄関には野次馬生徒が

「スバルー！話を聞かせるー！！」

そして、男子が詰め掛けた。その時、

「ちよつと待った!!」

SCロックマンが現れた。そして、SCロックマンは言った。

「俺はザンクロス・ロクマンだ。やろうと思えば、いつだって、お前らも一撃だぞ！」

「ひええええええええ!!」

そして、男子は逃げていった。先生達は啞然としている。

「ありがとう、賢哉君。」

スバルはSCロックマンに感謝の意を述べた。

「この電波体は賢哉君くんだっただの？」

ルナはそう言った。

「そうだよ。ものすごく強いよ。」

「へええ」

そして、啞然としていた先生達が我にかえりSCロックマンも電波変換を解いて教室に入って行った。

一方スタジオでは……

「監督、お願いがあるんですが……」

ミソラが監督に言った。

「何だね？ミソラちゃん？」

「私、一人暮らしが恐くなってきたんです。また、泥棒に入られて、私まで傷つけられたら……それが怖いんです。ウツ……ヒック……うっ。」

ミソラの心ははもう、恐怖でいっぱいになっている。

「泣かないでくれ。お願いとは何だ？」

「引っ越させて欲しいんです。」

なんとミソラは引っ越させて欲しいといった。此処まで来たらもう王道。作者は泣きそうになっている。

「行き先はどこだ？あ！そうだ！あそこがあった。彼氏の家だ。」

「そうなんです。そこです。」

「分かった。手を打つよ。今日から行ってもいいよ。荷物は明日運

ぶ。

幸い荷物は住む家に人がいるから少なくて済む。仕事終わったら、行つてらっしゃい。

家の人には伝えておくよ」

「ありがとうございます！」

そう、あそこだ。もう分かるでしょう？そう、

スバルの家だ。

チクショウ！（作者にとって）（後書き）

凄い事になりそうです。
感想、待ってます。

新技開発

給食が終わり、昼休みになった。みんなはそれぞれのやることをやっている。賢哉は屋上で電話をかけて、暁と話をしていた。

『よお、賢哉。こっちは今、暇だから、雑談に付き合ってやろうか？』

「それはありがたい。」

賢哉は暁とただの雑談をするようだ。まずは暁から話題を出した。

『おい、うまい棒知ってるか？』

「ああ、ゲームで出てたな。」

うまい棒の話題である。うまい棒は暁の大好物である。

『お前、どんな味がすきなんだ？』

「俺は昔ながらのチーズ味だ。」

賢哉はチーズ味が好きらしい。暁はこう言った。

『ほほうチーズか。俺は、明太子味だ。』

「明太子か。暁はマニアックだなあ。なら、次の話題だ。ウィザードだ。」

次に賢哉はウィザードの話題を出した。

『ウィザードなら、アシッドがな、この前ハンターで寝ているときに寝言いったんだよ。その寝言と言うのが、『ウォーロック！止めてください！うあああ！』なんだ。可笑しい可笑しい！』

『ギルティスラッシュ！』

『いてっ！賢哉、お前はどうか？』

「俺のサザンクロスなんかウォーロック達数人を相手にして、一瞬で倒しやがったんだ。凄いだろ？」

賢哉は自分のウィザードの自慢をしている。暁も負けじと、自慢した。

『アシッドなんて、世界中の人間を一瞬で消せるほどのパワー持ってるんだぞ。』

『私にそんなパワーがあつたら先ず最初にシドウを消します。』

『おいアシッド！調子に乗るな！』

絶対に嘘だ。アシッドにそんなパワーはあるはずが無い。そして、昼休みのチャイムが鳴った。

「お、昼休みが終わったみたいだ。切るよ。」

そして、賢哉は電話を切った。時刻は1時。5時限目が始まる時間だ。賢哉は急いで教室に向かった。

時は経ち、下校の時間。賢哉とスバル、委員長3人組、ツカサ、ジャックは通学路を歩いている。

「じゃ、僕は、ウェーブライナーで帰るよ。」

「俺も帰る。じゃあな。」

ツカサ、ジャックはウェーブライナーで帰った。

「じゃ、俺も帰るぜ。じゃあな、委員長。」

「僕も帰ります。また明日。」

ゴン太とキザマロもかえって行った。残るは委員長、賢哉、スバルだ。

「おい、ツンデレドリル!」

「ツンデレって何よ?」

「お前の事だ」

どうやら委員長のあだ名はツンデレドリルらしい。

「お前、ロックマンが好きなんだろう?」

「ええ、そうよ。それが何か?」

委員長にロックマンが好きか聞いた。委員長はそれに平然と答えた。

「って事はスバルも好きなんだろう？」

「べ、別にスバル君は違うわよ。」

ルナの答えに賢哉は内心大爆笑していた。

「はは！おもしろ〜！」

「何が可笑しいのよ！！？」

賢哉は少し笑った。ルナは怒り気味で賢哉に言った。

「お前はバカか？ツンデレにも程がある。そして、そのえらそうな態度、ムカつくんだよ。自重しろ。」

「キーーーーー！何ですって？明日覚えてらっしゃい！かえるわ。」

委員長は自分の家に戻っていった。

「賢哉君、言いすぎだよ」

「明日楽しみだなあ。」

数分して二人は家の前に着いた。だがウォーロックの様子がおかしい。

「おい、スバル、中からハープの気配がするぜ。」

「家の中にハープがいるわ。」

ウィザード達は家の中にハーブがいる事を察知した。

「って事はミソラちゃんが中にいるのか。まあ、入ろうか。」

「そうだな。」

そして、二人は、家の中に入った。入って、玄関で靴を脱ぎ、リビングに入った。するとそこには、テレビを見ているミソラの姿があった。

「ミソラちゃん、いたんだね。何しに来たの？」

「また泊まりに来たんじゃなかるうか？」

二人はミソラに何故此处に来たのか聞いた。

「実はね、昨日私の家に泥棒が入ったんだ。」

「ミソラちゃん、大丈夫だった？」

「私のいない間に起こった事だから大丈夫だよ。」

ミソラは自分の家に泥棒が入った事を言った。それに対しスバルは心配したが、それはミソラがいないときに起こった事件であるから、ミソラはいたって変わりはない。

「で、この家に何しに来たんだ？用が済んだら、はよ帰れ。」

「私は、泥棒に入られた後から一人暮らしが恐くなって、この家に、

「近所迷惑だろ！ボケナス！」

賢哉はそう言つてスバルの頭を殴った。

「いつてえええ！何すんだよ！」

当然スバルは悲鳴をあげた。なにせ頭を殴られたからだ。

「茜さんに伝えたのなら、別にOKだ。」

賢哉は今までずっと一人暮らしだったミソラを心配して、承諾した。

「もういいや。母さんに言っただんなら。ってまだ納得いかない。委員長の家でもよかったんじゃない？」

スバルは納得がいかずミソラに委員長の家を薦めた。だがミソラは次の一言で、スバルに止めを刺す。

「スバル君じゃないと嫌なの。だって、スバル君は私の彼氏だもん。」

その一言はスバルにとってまさに止めに相応しい言葉だった。そして、スバルは堪忍した。

「（何か今の一言、可愛かったなあ）分かったよ。」

「よし、決まり。ミソラの寝るところはトイレね。」

賢哉は凄いギャグを言った。女性にそんな事を言うなんて賢哉も度

胸がある。当然賢哉は頬をミソラに叩かれた。

「女の子をトイレで寝かせるなんて、サイテーね。」

「嘘に決まってんじゃないか！鉄板胸野郎！」

「鉄板胸ですって？許さない！勝負するわ！覚悟は出来てる？」

ミソラが勝負を挑んできた。だがハーブが入ってきた。

『ミソラ、戦わないほうがいいわよ。サザンクロスはFM王とも肩を並べる實力だわ。』

『ミソラちゃん、ハーブの言ったとおりだよ。賢哉センスあるわよ。』

そしてやっと、収まった、皆は数分テレビを見て、そして茜が帰ってきた。

「ただ今。あらミソラちゃん、もう来たの。これからよろしくね。」

「よろしくお願いします。お母さん。」

ミソラは順応が早い。だから茜の事をお母さんと呼んでいるのだ。そして、スバル、賢哉、ミソラは部屋に部屋に行った。

「スバル君の部屋って、宇宙の本が多いねえ。」

「はっきりに言って、スバルは、こういうことに夢中になっているし、

彼女も出来てるから、リア充なんだよ。」

賢哉ははっきりとスバルの事をリア充と言った。それに対し、スバルは、

「リア充って何？」

こう尋ねた。そして、賢哉の長い説明が始まる。

「リア充って言うのは、その名のとおり、リアル充実ってやつだ。だがリア充にもヒエラルキーと言うものがあって、1番下がキヨロ充と言うやつだ。」

キヨロ充と言うのは、人の目を気にして、友達がいないと何も出来ないやつだ。まあ、お前みたいな絆を大切にするやつだ。こういうやつは、

オタクがものすごく嫌ってるんだ。だがリアとキヨロは別のものだと考えてみる。リア充はオタクのことを尊敬しているみたいなんだ。

だがオタクのほうは、スバルみたいなやつ、まあ、リア充に「リア充死ね 爆発しろ！」と言っている。まあ、こんなもんかな。」

賢哉の長い解説は終わりミソラとスバルが感想を言った。

「私達みたいな人って、オタクには嫌われているんだ。」

「参ったなあ。絆を大事にするほど一部の人から嫌われるんだあ。」

そして、会話は続き、夜になった。午後7時、茜が3人を呼んだ。

「スバル、賢哉、ミソラちゃん、ご飯よー！」

「「「はい」」」

3人は1階へ降りていった。食卓にはパーティ料理が並べられていた。それをみて最初に口を開いたのは賢哉だった。

「うまそ〜……」

もはや賢哉は料理に見とれている。そして、3人は、食事にした。

「お母さん、これ美味しいですね。おかわり！」

ミソラは、5杯めのおかわりを頼んだ。星河家の食費の40%はミソラに取られるだろう。だが茜は気にせずどんどんおかわりを持ってきている。数十分して、全員食べ終わった。そして、大吾が帰ってきた。

「ただ今。」

「お帰りなさい。ご飯は出来てるわよ。」

「じゃ、食べるか。」

その後大吾も食べ始めた。3人はテレビを見始めた。だが賢哉にはテレビ等興味はない。

「おい、スバル、ミソラ。」

「「何？」」

賢哉は二人を呼んだ。対して二人は声を合わせてどんな用か聞いた。

「新技作るぞ。」

賢哉はものすごい唐突な発言をした。スバルとミソラは何故かつまんなそうな顔をしている。

「えええ〜。やだよ〜。」

「私女なのよ〜」

当然二人は拒否した。でも賢哉は言い返した。

「こうでもしないと、強くなれないだろう?」

『おい、スバル、はやろうぜ。』

『ミソラ、面白そうじゃないの? いってみましょう?』

二人は賢哉、ウォーロック、ハープに言われ渋々了承した。

展望台。3人は電波変換していた。

「先ずスバルから。お前は、よく考えたらバトルカードと、バスター、ウォーロックアタックしか攻撃に使ってない。だから何個か新技作る。」

そうして、スバルの特訓が始まった。

「左腕のウォーロック。」

『なんだ？』

先ず手始めにウォーロックに声をかけた。

「スバルの左腕に力を集中しろ。」

SCロックマンに言われてウォーロックはスバルの左腕に力を集中した。数秒経った。そしてなんと！

「僕の左腕が青い電波に包まれている……」

そう、SSロックマンは、左腕に青い電波の闘気を纏った。

「スバル君凄い！」

その姿にミソラは驚いた。

「やっぱり予想通りだ。これを「キズナノヒカリ」とでも名付けよう。これからが本題だ。これからウィルスと戦ってもらう。だが、バトルカードは使っな。」

賢哉はスバルに拳で戦えと言った。

「やってみるよ。」

そして、丁度いいタイミングでウィルスが出てきた。出てきたのはモノソードGとメットリオ3とモジャハイGだ。

「行くぞ！はああああ！」

SSロックマンはメットリオ3にウォーロックアタックで一氣に近づき、拳を使って、コンビネーションパンチを食らわせた。これでメットリオ3はデリートされた。

「これぞ、新技「ロックアーツ」だ。」

SCロックマンはこの技をロックアーツと名付けた。次にSSロックマンは地面に拳を振り下ろし、衝撃波を出した。モノソードには効かなかったが、モジャヘイGは一撃でデリートされた。

「新技、「ロックウェーブインパクト」だ。」

この技をSCロックマンはロックウェーブインパクトと名付けた。そして、モノソードの色が変わりSSロックマンの目の前に来た。その瞬間SSロックマンは二つの拳を合わせて、一氣に振り下ろした。

そして、また、モノソードを一撃で倒した。

「すごいな。ウィルスを一瞬で倒してしまった。これを「ロックアームハンマー」とでも名付けよう。」

そして、ウィルスを全部倒した。この技をSCロックマンはロックアームハンマーと名付けた。

「賢哉君どうだった？」

「いいぞ。次はミソラ。」

そして、次はミソラだ。

「どんな技にする？」

「俺が近距離技の手本見せてやる。ギター貸せ。」

賢哉はハープノートからギターを貸してもらい、手本を見せた。

「ショックスイング！」

なんとSCロックマンはギターを横にブンと振った。そして、ウィルスは一撃でデリートされた。

「こういうやつ。やってみるか？」

「やってみる。」

そして、次はハープノートがギターを貰い、挑戦した。相手のウィルスは3体ほど。

「ショックスイング！」

ハープノートはウィルスをギターで殴った。そして、ウィルスたちは全てデリートされた。

「やった〜」

ミソラが喜んだ瞬間ハープが言った。

『痛いわね〜。ギターで殴ったら私まで痛いじゃないの。』

そう、ギターで殴ったら、ハープが痛がる事になる。

「じゃあ、これは切り札って事で」

ミソラが提案してハープが了承した。そして、3人は帰っていった。

新技開発（後書き）

かつこいいですね。新技。
感想、待ってます。

誓い

3人は家に着いた。そこには茜が待っていた。

「お帰りなさい。どこ行ってたの？」

「展望台で特訓してたんだ。」

スバルは特訓した事を報告した。

「疲れたでしょう？お風呂入りなさい。」

そして、3人は順番に風呂に入った。そして、全員上がった後3人はリビングで茜と話した。

「母さん、ミソラちゃんはどこで寝るの？」

先ず、スバルは茜にミソラはどこで、寝るのか聞いた。

「もちろんスバルの部屋じゃない。」

茜はスバルの部屋と言った。

「なら布団用意してよ。」

スバルは茜に布団を要求した。

「後1枚あるわね。用意するわ」

スバルは安心した瞬間、

「ちょっと待ったあ！そしたら俺の立場どうなるんだ！？俺がミソラと一緒に寝ろってのか？嫌だね。」

賢哉が文句を言った。それに対しスバルは、

「別にいいじゃん」

完全他人事のように思っている。そして、遂に言い争いが始まった。

「お前、ミソラと寝ろ！」

「賢哉君がミソラちゃんと寝てよ！」

ギヤーギヤー争っているうちに茜が制裁に入った。

「静かに！なら二つの布団で3人で寝たらいいでしょう？。」

この一言に一瞬固まった。そしてスバルが口を開いた。

「ならこの順番で。」

ス 賢 ミ

「

「ちょっと待ったあ！この順番だ

賢 ス ミ

「

スバルはミソラを賢哉の隣に、賢哉はミソラをスバルの隣にしようとしてくる。

するとまた言い争いになった。

「僕がミソラちゃんと寝たら、前よりも酷いこととして傷つけてしまうかもしれないよ？」

スバルは断固拒否した。それに対し賢哉は恐ろしい事を言った。

「なら傷つけろよ。」

賢哉の言葉にスバルは数秒固まった。その後また賢哉が言った。

「ミソラはどんな覚悟でお前に告白したんだ？お前になら自分の身を預けられる。何をされてもいい。そんな覚悟でお前を彼氏にしたんだぞ？ちゃんと応えてやれよ。」

賢哉はスバルに悪い意味でもっともな事を言った。ミソラも賢哉の味方するようにこう言った。

「そうだよ。賢哉君の言うとおりだよ。スバル君になら何をされてもいいよ。」

そして、スバルは遂に堪忍した。

「分かったよ。僕が間違っていた。ミソラちゃんの覚悟に応えないといけないからね。一緒に寝るよ。」

超危ない線の会話をして、結局スバルがミソラと一緒に寝ると言う

形で決まった。これには作者も泣いているだろう。

そして、スバルの部屋では、3人が寝る準備をしていた。

「よし、布団敷いた。寝るか。あれ？サザンクロスがない？まあいいや直ぐ戻ってくるだろう。」

そして賢哉は布団に入った。

「スバル！こんな美人と一緒に寝れて羨ましいぞ！お休み！」

そう言つて賢哉は寝た。スバルとミソラ、ラブラブカップルは一緒にベッドに入った。これに対して作者は本当に悲しんでるだろう。

「じゃ。お休み。つてくつ付かないで！」

ミソラは今まで全然誰かと一緒に寝ると言う事をした事がない。だからスバルと一緒に寝れて嬉しいのだ。これぞ甘えん坊。作者にとつて非常に嫌な性格だ。

「くつ付いて欲しくないんならこうして欲しいの？」

そう言つとミソラは、凄い力でスバルに絞め技を繰り出した。所謂（いわゆる）抱き絞め攻撃だ。甘えん坊にも程がある。

「イテテテ！！止めてよ力入れるのは。もっと弱くしてよ。」

当然スバルは痛がっている。骨が折れそうなくらい強かったのだから。それに対してミソラはこう言った。

「分かったよ。なら弱くしてあげる。じゃ、お休み。」

そう言うのと抱き絞めを弱くして。の・太の早さで、寝た。因みに今、向き合って寝てる状態だ。

「しょうがない。僕も寝るか。」

そう言うて寝ようとしたが、ある衝動に絡まれた。

「（やっぱりいつ見てもミソラちゃんは可愛いな。絶対に守らないと。もう、ミソラちゃんは僕のものだ。誰にも渡さない。絶対に守り抜く。）」

スバルはそう呟いて、またまた大胆なことにミソラを誰にも渡さないっていう感じで抱きしめて寝た。すると賢哉が起きてきた。

「（ちょっと様子を見よう……おいおい。こいつどうなってるんだ？とりあえず撮ろう。）」

賢哉は写真を撮って寝た。その後寝たと思っていたミソラが起きた。

「やっぱりスバル君はかつこよくて大胆だなあ。私はスバル君のもの。だから、何時までも傍にいるよ。だって、私の心を奪った、たった一人のドロボウだもん。」

そう言うてミソラはスバルの唇にキスして寝た。

一方サザンクロスは……

『星空が綺麗だな』FM星でも孤独だったから夜になったら1人で

星を見てたんだよね。でも、今は友達に恵まれているし、何よりもまた戦えることが嬉しいんだよね。

絶対に誓うわ。賢哉をサポートして、FM星人からの信頼を取り戻してみせる。』

サザンクロスは展望台で南十字座を眺めてそう誓った。

誓い（後書き）

こんな展開ですみません。
感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121q/>

流星のロックマン《次元を超えた出逢い》

2011年2月17日18時33分発行